
THE RED MOON

紅い布

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE RED MOON

【Nコード】

N3595E

【作者名】

紅い布

【あらすじ】

唐突に失われてしまった平穏な休日。恐怖という闇が日常を蝕み、絶望が多くの人々を奈落の底へ引き摺り込んでいった。ただの一般市民でしかない晋と綾乃の兄妹は、現世に現れた地獄から生き延びるために、二人で力を合わせて立ち向かっていくことを決意する。これは、極限の状態の中で育まれる兄妹の『愛』と『絆』を描いた物語。

宛先：読者様 件名：今はまだ平和です

PM 13:13

ここはとある大手焼肉チェーン店。

広い店内には店長とバイトの従業員が黙々と自らの作業を進めている。

客はまだ一人もいない。

その寂しすぎる風景に、思わずどこかで閑古鳥が鳴いているんじゃないかという錯覚を抱いてしまいそうだ。

大きなガラス張りの店内には陽光がおしげもなく降り注ぎ、それがまた一際客足の無さを強調しているかのようで、表現しがたい哀愁を感じさせる。

ただ、この店は決して繁盛していないワケではない。

店舗が最寄駅からかなり離れているため、平日のお昼時はほとんど客が来ないのだ。

まあ、平日の昼間から焼肉を食らうというのも常識的にどうかと思うし、客足が途絶えてしまうのも仕方ないだろう。

なので、この時間帯に働いている従業員の大抵は、自分にできる仕事をやりつくしてしまい、暇を持て余すのが通例となっている。

しかし、今日はゴールデンウィーク初日。

お昼時でもある程度の客が来ると予想していた店長は「なんで客が一人も来ないんだ？」と、ひたすら首を傾げていた。

別に、焼肉店だからといって焼肉しか出していないワケではない。

ちゃんとある程度の常識的なお昼メニューは用意してあるのだ。

「ちよつと失礼しますね」

そんな店長の横を一人の若い女性従業員が、バケツと雑巾を持って

通り過ぎる。

今年の春に大学への入学を果たしたばかりである蓮杖綾乃だ。

プロポジションが良く、絶世の美女と評して差し支えない整った顔立ちをしている。

そんな彼女の性格は、大人しいが社交的で、仕事に関しては細かいことまでしつかりとやり通す。人を気遣う優しさを持ち合わせた女性であり、入学した大学では早速多くの男子生徒から目を付けられている。

本人は知らないが、ファンクラブまで設立されているほどの人気を博しているというのは、大学内では周知の事実だ。

さて、この綾乃だが、彼女は2年程前からこの焼肉店で働いている。店内でもそこそこ古株に入る人材だ。

その頃から彼女を見るのが目的で店を訪れる客が激増した（客だけでなく、男性の従業員も増えた）。

駅前でないにも関わらず、この店が他の駅前店舗の売り上げすら凌駕しているのは、紛れも無く彼女の功績だ。

「　　」

本人の知らぬところで多くの人を魅了する綾乃は、一人だけ上機嫌に働いている。

店長や他の従業員の目も憚らずに、鼻歌まで歌いながらテーブルを雑巾で拭いていた。

本人が自覚ナシに浮かべる微笑は、まさしく百万ドルの笑顔とでもいべきか。

「随分と機嫌がいいじゃない？何かいいことでもあったの？」

男性従業員が熱っぽく綾乃を見つめるなか、彼女と仲がいいベテラン女性従業員である柏木が苦笑しながら近づいてきた。

「え？なんでわかったんですか？」

「そりゃあね……営業用じゃない素のスマイルを意味も無く垂れ流してるアンタを見れば、誰でもわかるって」

「　　？私、笑ってましたか？」

「ちよつ！？鼻歌まで歌ってたじゃない！？」

首を傾げる綾乃に、呆れたように柏木は額を押さえた。

「自覚なしですか……。まあ、それはいいとして。で、実際何があったの？男関連？」

よほど暇を持て余していたらしく、柏木は勤務時間中にも関わらず完全に休憩モードに突入している。

そんな柏木を快く思わない店長を含め、男女問わず周囲の従業員全員が聞き耳をたてるなか、綾乃は笑顔で頷いた。

その瞬間、

「ンノオオオウツツ！！！」

男達の悲鳴とも咆哮とも判別つかない魂の叫びが木霊した。その中には店長も含まれているのだから救われぬ。

吃驚して思わず喉の奥で悲鳴をあげてしまった綾乃は、周囲の男性従業員を心配そうにみつめた。

「皆どうしたのかな？」

「さあ？持病の発作かなんかじゃない？それよりさ！」

しれっとした態度から一変して、目をキラキラと輝かせる柏木。

「男って彼氏？彼氏なんでしょ！？どんな男？カツコイイ！？」
再び静かになる店内。どうやら、皆が気になるようだ。

「え あ、あはは。違うの」

「違うって？」

「彼氏とかじゃなくて。今日、兄が家に帰ってくるの」
「あ、そうなんだ」

絶望から一転、ホッと息つく男性従業員達。

なかには手を組んで神様に感謝の祈りを捧げている者もいる 店
長もその一人だ。

上機嫌の理由が兄の帰郷だと知って心から安心したらしい。
もう二人の会話の内容に興味が無くなったのか、聞き耳をたてていた従業員達は速やかに自らの持ち場に散っていった。

そんな同僚達を冷たい目で睥睨しながら、柏木は話を続けた。

「で、どんなお兄さんのの？」

「血は繋がってないんだけどね、とても強くて優しくて、私にとっ
て憧れの」

「……………」

嬉しそうに兄のことを語る綾乃に対し、柏木は彼女が宿すその瞳の色がなんであるのかを察して無言になった。

「綾乃……今のあなたの表情……それ、私の友達が自分の恋人を自
慢しているときの顔にそっくりよ」

「っ！？」

柏木の思わぬ台詞に、綾乃は自分でもおかしいと思うくらいに硬直してしまう。

その様子を見て、からかい好きである柏木の嗜虐心が刺激されたのは言うまでもない。

「あなた、お兄さんのことが異性として好きなんですよ？」

「えっ！？突然何言い出すの！？そ……そんなことあるワケ……」

「あ、違うの？なあんだ。じゃあ、綾乃はお兄さんのことを”あくまで妹として慕っている”だけなのね？」

「そ………そうです！………そうに決まってるでしょ！………ううっ」

綾乃は目に涙を溜めながら、上目遣いで柏木を睨む。

もし、綾乃のファンクラブ会員が見たら「萌えー！ツツ！……！」とか叫びながら悶え死にかねない。

嘘のつけない子ねえ。

そう思った柏木はからかうのをやめると、

「自分の中にあるその想いがなんなのか、早く自覚したほうがいいよ。あなたのステキなお兄さんが誰かに獲られる前に、ね？」

真っ赤になつて俯いている綾乃の頭にポンッと手を置いた。

平和な日常風景の二コマ。

だが　そんな尊い平和が、今この瞬間にも砂上の楼閣のように徐々に崩れ去りつつあることを、二人は知る由もなかった。

宛先：読者様 件名：おや？ガソリンスタンドの様子が…

PM 17:36

朱色に染まる空。

日は傾き、その輝きは儂くも美しい色彩を残す。

道に映された建物の影は長く伸び、もうすぐ訪れる闇の到来を示さんとしているようだ。

そんな中、影の合間を縫うように一台のバイクが疾走していた。整備されたばかりの道路だが、利用する車の量は極端に少なく、さながらフリーサーキットを楽しむかのようにスピードを上げている。ブラックとシルバーを基調とした大型のスポーツツアラーだ。

ライダーは黒のヘルメットを被り、黒の皮グローブ、ポケットが多く付いた薄手の黒ジャケット、中は黒のポロカットソーに黒色のジーンズ、さらに黒のトレッキングブーツ。

陽光を浴びて紅く反射する十字架紛いのネックレスが際立っている。青年はどうやら黒色を極端に好んでいるらしい。

7

それはさておき、広い二車線の道路を快調に飛ばしていたバイクは、タイミング悪く青から黄、最後に赤の順に色を変えた信号に捕まり、あえなく減速の後、停車した。

「…………ちっ」

せつかくの快走を邪魔されたことから思わず舌打ちを漏らす。

「 …… っしかし、ここも変わったなあ……………」

気を取り直した青年は、ゆっくりとした動作で周囲を見渡した。

フルフェイス型のヘルメットのため青年の表情は何い知れないが、その声は何かを懐かしむような……郷愁を感じさせる声音だった。

「約4年ぶりか……」

信号が青色に変わる。

青年はバイクをゆっくりと発進させると、信号を越えた先にあった小さなガソリンスタンドに入った。

『いらっしやいませー』

女性店員の気の抜けた挨拶が青年を迎えた。

店員が指示した場所にバイクを停車させると、ヘルメットを脱ぐ。

さらりと黒髪を靡かせて、ヘルメットの下の素顔があらわになった。

「っ！！」

思いがけず整った顔立ちの青年に、女性店員は思わず息を呑む。

なにやら頬を赤く染めている女性店員にバイクを預け、青年は自販機に向かった。

自販機から缶コーヒーを買い、隣に用意されていたベンチに腰掛ける。

トッブルを開け、ブラックのコーヒーを軽く口に含みながら、青年は夕日に映える町並みをじっと眺めた。

憂愁の彩りを帯びる瞳でたそがれる姿は、高尚な画家の創造意欲を大いにかき立てるに違いない。

そこへ、暇なのか中年の男性が話しかけてきた。

「お客さん、ここらへんの出身ですか？」

「あ、そうです。よくわかりましたね」

青年は男性に顔を向けると人懐こい笑みを浮かべた。

相手の名札を見る限り、どうやらこのガソリンスタンドのオーナーらしい。

「そりゃあ、そんな目で街の景色を眺めてたら誰だつてわかりますよ」

「……そんなわかりやすい顔してましたか」

「美男子が夕暮れ時に景色を眺めて、たそがれる。絵になりますな」

「はあ……恐れ入ります」

苦笑しながら、青年は恥ずかしそうに右頬の辺りを搔いた。

「里帰りですか？」

「はい。4年ぶりに帰ってきました」

青年がわざわざ実家に帰ってきた理由　それは、義理の妹の様子を見に来たためだった。

青年には現在、義理の母と義理の妹、そして実の妹の家族がいる。（ちなみに青年の実の両親は既に他界している）

今はゴールデンウィーク中で、義母は実の妹と共に抽選くじで引き

当てた旅行に出掛けていた。

ところが、義理の妹はバイトがあるといって母親についていかなかったのだ。

娘が一人で家に残ったことを心配した義母は「最近は何騒だから様子を见に行つてほしい」と青年にメールを送り、今に至る。

「ここも大分変わりましたね。あの”大手製薬会社”が来てからかな？地下鉄が通つて、道路が完備された。ほんの少しだけ残つていた田んぼも潰されて、そこに何かの施設が建てられて……昔の面影がまつたくない」

「そうですね。私もここが地元なんです、慣れ親しんだ景色が消えていくのは寂しいですよ」

青年の少し寂しげな言葉に、オーナーは同意した。

今、青年が脳内で再現しているのは、今のような近代化が進んだ町並みではなく、少し昔の　まだ田舎っぽさが残る景色。

しかし、時代は流れ、世界は変わっていく。

その一端を垣間見る青年は、力無く笑つた。

沈黙が漂う。

「それにしても……」

少し重くなつてしまつた雰囲気振り払うかのように、青年が口を開いた。

「せっかく道路が整備されたっていうのに、こつも車の往来が少ないんじゃない……。ちよつとばかし虚しいですね」

話題を変えて、少しでも雰囲気を明るくしようと思ったただけだったが

「ああ、いや、それが……実はこの辺りの道路は結構車の通りが激しいハズなんですよ。それが、どういふことか今日ばかりは車どころか、人もあまり見かけなくて」

「そうなんですか？」

「ええ……。昨日はパトカーが引つ切り無しに行き来していましたし。最近、このあたりで物騒な事件が続いてるから、みんな引き籠もってるのかな？」

ドクン。

「物騒つて……？」

「ご存知ありませんか？ ニュースや新聞にも載せられて、世間では結構騒がれているんですが」

ドクン。

この先は聞いてはいけない気がする。
なぜだか青年はそう思ったが、もう……遅かった。

「このあたりで人が人を喰い殺すっていう事件が起きてるんですよ。それも、立て続けに」

カラン。

思わず、缶を落とす青年。

まだ残っていたコーヒの中身がアスファルトの地面に広がっていく。

「犯人は即日逮捕されたいんですが、次の日にはまた同じ事件が起きてますね。しかも同時に複数件。あまり詳しくはマスコミにも公表されてないみたいですが……」

オーナーは一旦、間を置くと、そつと囁くように言った。

「なんでも噂によると、食い殺されたハズの人間が生き返って、他の”生きている人間”を襲っているとか……」

その一言に、青年はなぜか途方もない恐怖を感じた。理由はわからない。

普通に考えれば、こんな話はゲームか映画の中だけのコメディではないだろう。

だが、今この瞬間。

自分は、決して踏み込んではいけない世界に踏み込んでしまった

そんな漠然とした心境が、青年の心の内を蟲が這いずるようにぞわぞわと支配していった。

「それってどういう」

『給油終わりましたー』

なんだか、嫌な予感がする。

焦燥感が青年を駆り立てる。

一度灯ってしまった不安の火は、もう消せそうになかった。

青年はさっさと料金を支払うと、バイクに飛び乗ってエンジンをかけた。

重い駆動音が狭いガソリンスタンドに木霊する。

「それじゃ、俺はこのへんで！」

『ありがとうございますー！』

そのまま、スロットルを全開にして道路に飛び出していった。

青年を見送ったオーナーは「少し脅かしすぎたかな」と苦笑いしながら事務所に戻り、女性店員は箒を持って外の掃除を始めた。

そこへ、おぼつかない足取りの人影が……

「ん？」

近づいてくる人の影に気づいた女性店員はとりあえずお決まりの挨拶をしようとして、

「いらっしゃい　っ！ー!？」

営業スマイルの代わりに、驚愕と恐怖に引きつった表情を露にした。

日は沈み、紅い月が顔を擡げる。

宛先：読者様 件名：少し静か過ぎる夜ですね

P M 17:45

ここは、焼肉のチェーン店。

時刻は夕方を過ぎ、しばらくは休日が続くということで、羽目を外した客達が肉塗れの夕食にありつこうと店内は大いに繁盛している……ハズなのだが。

「暇ですねー」

「暇だね」

店の中は見事なまでに閑古鳥が鳴いていた。

白のワイシャツに黒のスカート、同じく黒のエプロンといった素っ気無い制服に身を包んだ女性二人組みが、カウンターに頬杖をつかんばかりにだらけている。

あ、いや……今同時に頬杖をついた。

勤務時間中にあるにも関わらず、堂々と頬杖をついた犯人はベテラン従業員である柏木とこの店で働いて約2年になる綾乃である。

二人はシフトでよく組んでいる他、悩み事に関してお互いに相談を持ちかけたりとプライベートでもかなり仲がいい。

「ホントに何もすることがないっていうのも、なかなか辛いですね……」

綾乃は背中まで伸びたストレートの髪を軽く払いながら、嘆息した。

他の店員も窓を拭いたり、皿を磨いたりしているが、それも今日に

限っては幾度と無く徹底的に完遂してしまったのであまり意味はない。

あまりのやる事無さに辟易しながら、綾乃は珍しく溜息を吐いた。

「なんで今日に限ってお客さん誰も来ないんでしょう？」

「さあねえ。連日の猟奇殺人に脅えて、みんな引き籠もってるんじゃない？」

いつもなら綾乃のシフト時間を狙って必ず何組かの客が来店するのだが、今日に限っては誰一人として店にこない。

柏木が頼杖を崩しカウンターに突っ伏してしまつのを横目で見ながら、綾乃は何ともいえぬ不安を抱えていた。

「もうそろそろ兄が店まで迎えに来てくれるはずなんですけど、この様子を見たら悪い印象持ちちゃうかも……そんなのヤダな……」

「いや、悪い印象も何もないでしょう？事実、客が来ないんだし。

少しでも良い印象持たせたいなら、お兄さんと一緒にこの店で食事するべき……ああ……ダメかあ。バカ（男性従業員&店長）共が大人しく職務を遂行するとは思えないわね。貴方と一緒に食事なんてしてたら、何かしらの嫌がらせするに決まってるわ」

そう呟きながら嘆息する菅原に対し、綾乃は苦笑しながら否定した。

「いえ……お店の事じゃなくて、この街に対してです。こっちに来るときもほとんど人を見かけなかったし……まるでこの街が死んでしまったみたいで、少し不気味じゃないでしょうか？」

「……ちよつと、不気味なこと言わないですよ」

闇に包まれた店の外を見つめながら呟く綾乃の言葉に、柏木は微かに背筋を震わせた。

「そついや綾乃知ってる？最近出回ってる猟奇殺人についての噂」
「え？何ですか？それ」
「この事件って人が人を食い殺すってやつじゃん？実はね、これにはえげつない噂があつてさ」

柏木は自分の話にこの店の全員が聞き耳をたてていることを確認すると、満足気に話を続けた。

「なんでも……食い殺された犠牲者が数時間後に生き返って、他の生きている人間を襲ってるんだって！」

「……」
「そいつらって身体中が腐ってるらしいんだけど、生命力が異常なくらいあるんだって。そんなでもって、その化け物に掠り傷でも負わされたが最後 数時間後には傷を負わされた人間も”そいつらの仲間入り！ってワケ”」

柏木は「イヤーン！こわ〜い」などとおどけているが、綾乃はなぜか”ただの噂”と割り切ることができなかつた。

「その噂って本当ですか？」
「やあねえ、そんなワケないでしょう？噂ってのは根も葉もないから噂なのよ」

脅える様子を見せる綾乃に柏木は励ますように言った。
二人の話を盗み聞いていた他の従業員も、『可愛いなあ』といった感じで笑っている。

だが

「でも……もし、その噂が本当だとしたら」

この店にいる人間はまだ知らない

「お客さんが来ない理由も、不気味なくらいこの辺り一帯が静かな理由も説明できますね」

パリン！

「「キヤアツ！？」」

『あつ、すいません！』

皿を磨いていた男性従業員が誤って皿を落として割ってしまったらしい。

思わず悲鳴をあげてしまった二人はしばらく硬直した後、顔を見合わせて笑いあった。

そこへ、エンジンの重い駆動音が聞こえてくる。

「あつ！もしかして今日初めてのお客さんかな？」

柏木が嬉しそうに言った。

綾乃の台詞が尾を引いていたのだろう。

そうこうしているうちに誰かが店まで駆けてくる音が聞こえてきた。だが、バイクのエンジンを切っていないのが気になる。

そして、乱暴に開け放たれた扉から姿を現したのは

「お兄ちゃんっ！」

「綾乃か!？」

「えっ!?!この人が綾乃のお兄さん?凄いいい男じゃん!！」

さきほどガソリンスタンドを慌てて飛び出した青年だった。

宛先：読者様 件名：もう引き返せそうにありません

PM 17:53分

「無事だったか……よかった」

綾乃の兄である青年 晋しんは綾乃の姿を確認するなり安堵の息を漏らしたが、すぐに表情を引き締めると、

「綾乃すぐに着替えて荷物を取ってこい。あとみなさんも！すぐにここから逃げる準備をしてください！」

諭すように、しかし、有無を言わせぬ迫力で叫んだ。

「えっ！？お兄ちゃん、どういうこと？」

「事情はすぐにわかる。いいから早く着替えてこい！その格好じゃ、いざつとときに上手く走れないぞ」

上手く走れないって、どういうこと……？

わけもわからず混乱する綾乃だったが、これまでに見たことのない義理の兄の真剣な表情に何かを感じ、大急ぎで準備に取りかかった。たとえ一億人が嘘だと言っても、晋が真実だと言え、綾乃は晋を信じる。

それだけ絶大な信頼関係がこの兄妹にはあった。

だが、その他大半の者は事情を把握しきれていないのか、ただ困惑するだけで何もしようとはしない。

まあ、突然「逃げる！」といわれても理解が追いつかないのは無理からぬことなのだろうが……。

『何なんだよあいつ……頭おかしいんじゃない？』

『てか、俺らの綾乃ちゃんに対して馴れ馴れし過ぎだろ。兄だからって調子乗ってんじゃないやねえぞ……』

場違いな嫉妬の炎を燃やす男性従業員達に対して、内心で激しく同意する店長が一步前に進み出る。

「あの、君は綾乃ちゃんのお兄さんでしたっけ？（頭は）大丈夫ですか？とりあえず落ち着いて」

店長は恐る恐る晋を宥めようとするが、その前に

グチャ……グチャ……。

めでたく、本日二人目のお客様が来店した。

「え？」

“ソレ”は、紛うことなき死者だった。

床に落ちるどす黒い血肉。鼻を突き刺すような異臭。

今更、詳しい描写など必要ないだろう。

正真正銘の【ゾンビ】、化け物である。

服装からして元は女性なのだろうが、こうなってしまうてはもはや性別など無意味だ。

「くっ　もう来たのか!？」

『ア、ア、アアア……』

ゾンビは己の空腹を満たすべく、偶然近くにいた店長に襲いかかる

うとする！

「う、うわああああ！！！！！！？」

店長は足を縛れさせ、尻餅をついた。

その顔は紛う事なき恐怖で引きつっている。

「くっ……くるなあああッッ！！！！！！」

影で多数の女性店員に対して給金アップを餌に交際していた焼肉店の店長は、何とか”死”から後退しようとは必死に床を靴底で削る。だが、行動虚しく、ゾンビの腕は絶叫する店長の首に着々と伸びていく。

誰もが、自分の理解を超えた現実と目の前の恐怖に心を奪われ、指一本動かさないでいた。

喰われる。

店長は恐怖のあまり、ぼつかりと穴が開いてしまった心のどこかで、そう思った。

だが

「じのっ……」

死者の顎が店長の首筋に届く前に、晋の肘鉄を乗せた体当たりがそれを阻んだ。

ゾンビは大きく仰け反って壁に凭れ掛かる。

「はああああああッッ！！！！！！」

その隙を逃さず、晋はありったけの力を込めて、無防備な首に後ろし蹴りをぶちかました。

ボジュツ！

全身の毛が逆立ってしまうような鈍い音をたてて、ゾンビの頭が吹き飛ばされる。

頭を無くした首から赤黒い血が飛び散り、店の壁を盛大に汚した。数歩歩いた後、生ける屍は力なく地面に崩れ落ち、身体を痙攣させながら動かなくなった。

「げっ!？」

全身の腐食は見た目以上に酷いらしく、予想より遥かにゾンビの身体は脆かった。

首の骨を折るつもりではいたが、まさか頭ごと吹き飛ばとは思ってなかったため、晋は思わず情けない声を漏らしてしまう。

『うっ　　!!』

首の無い死体が痙攣する様をみて、その場にいる全員が吐き気を催した。

「はっ……ひっ……」

晋はなんとか吐き気を堪えて、失禁してしまいかねないほど怯える店長を一瞥する。

いや……たった今、彼のズボンの股間に滲みが……。

「………………。まあ、怪我はないようですね」
「うっ……は、あ……?」

とりあえず店長が無傷であることを確認し、皆がホッと息をつく。「
おい!!ま、窓の外が!!?」 間もなかった。

バンツ!バンツ!

乱暴に外から窓ガラスを叩く者の正体は言うまでもない。

焼肉店の外にはどこから現れたのか、ゾンビの群れが集結しつつあった。

宛先：読者様 件名：私達は足掻きます

PM 18:00

「ごめんお兄ちゃん！お待たせ ひッ!?」

痙攣する首の無い死体と、窓の外に群がる有象無象の生ける屍達。そのあまりにショッキング過ぎる光景に、綾乃は思わず喉の奥で悲鳴を漏らす。

「遅いよー。お前がモタモタしてる間に”アイツら”が集まってきた」

晋は呆れた顔で窓の外を親指で示す。

生ける屍が腐肉を撒き散らしながら窓ガラスを引っかいている様は、さながらB級ホラー映画のワンシーンのようだ。

「ごめんなさい……店長の悲鳴を聞いたら手が震えちゃって、うまく服着れなくて……」

泣きそうな顔で項垂れる綾乃。

晋は言葉を返す代わりに妹の頭を軽く撫でてやった。

すると

「あ！生存者だ！！生存者がいるぞ！！」

一人の従業員が放った言葉に、皆が一齐に窓の外を振り返った。そこには、生存者と思われる中年の男性が、負傷したらしい足を引

き摺るように歩いている。

負っている傷が見た目よりも重症なのか思うように走れないらしく、チャンスを見てゾンビ共が焼肉店に群がっている間に通り抜けようとしたらしいが……。

「ヤベエー!!”やつら”が気づいたぞッ!?”

「に、逃げるー!ー!ー!」

男性の存在に気づいた数匹のゾンビが呻き声をあげた。

『ヴアアアアア………』

『ひいいいっ!ー!ー!』

気づかれたと察して必死に逃げる男性。

だが、ゾンビに追われているという恐怖からか、足をもつれさせて転んでしまった。

片足が負傷していなければ、まだ逃げ切ること可能だったかもしれないが……。

『くるなっ!こないでくれえええ!ー!ー!』

ゾンビは、無防備に転がる獲物に容赦なく追いつがる。

結果は

「見るなッ!ー!」

『ひぎゃあああああ!ー!ー!ー!』

晋は妹に狂気の惨殺シーンを見せまいと、慌てて綾乃を自分の胸に抱き寄せた。

だが、夜気に轟いた悲痛な絶叫までは防ぐことができなかった……。

「……っ！……っ！？」

晋にしがみつき、震える綾乃。

その顔色は、真っ青を遙か彼方に置き忘れ、病的なまでに白く染まっていた。

あまりに現実離れすぎた恐怖に、混乱することさえままならないらしい。

男性の生々しい悲鳴は、魂の奥底にある潜在的な恐怖心を打ち震わすのに十二分な効力を発揮してくれたのだ。

映画とゲームでしか見たことのない殺戮を目の当たりにし、晋の心も底なしの恐怖に呑み込まれそうになる。

しかし、愛しい妹の存在がそんな彼に冷静さを保たせてくれた。

「……綾乃、気をしっかり持ちなさい」

晋は穏やかな声で諭そうとするが、綾乃はまったく聞く耳を持たず、兄にしがみついたまま脅えるだけだった。

よくみると、周りの従業員も綾乃と似たような表情をしている。

晋以外にこの恐怖に打ち勝つことができた人間は皆無のようだった。

「あやのっ！」

「っ！？」

決して力任せに怒鳴ったのではない。

だが、この兄の一声は、恐怖と絶望の闇に囚われていた綾乃を一気に現実へと引き戻した。

「お、お兄ちゃ」

「……大丈夫だ」

晋は優しく妹を包み込んだ。

兄の静かな心臓の鼓動を聞き、激しくぶれていた綾乃の心が徐々に落ち着きを取り戻していく。

「お前は、俺が命に代えても護るから 絶対に護るから」

この一言で何か吹っ切れた綾乃は、兄の胸から顔を上げ、強い意志を秘めた瞳で晋をみつめた。

そんな妹の眼差しを真正面から受け取った晋はこう言い放つ。

「足掻くぞ。全力で！」

「はいっ！」

宛先：読者様 件名：脱出劇の始まりです

P M 18:13

綾乃が精神的なショックから立ち直ったのを確認し、晋は脱出のタイミングを図る。

「俺のバイクまで一気に走るぞ。準備はいいか？」

「う……うん。大丈夫」

「よし。行く 『ちよつと待てよ!!』んあ？」

いざ店から出ようとした晋と綾乃の前に、晋と同じ年と思われる青年の従業員が立ちはだかった。

「……………渡部さん？」

綾乃に渡部わたべと呼ばれた青年は、声を荒げて言った。

「わざわざ自分達からあの化け物どもに突っ込むってのか！？正気じゃない！！それよりもここに立て籠もっていれば、いずれ助けがくるって！」

「そ、そつよ！きつとそつよ！！」

「下手に動くより絶対に安全だ！」

他の従業員も拳こぶしつて渡部に同意する が、

「助けは来な」

「来ないと思います」

晋の言葉を遮り、綾乃は強く言い返した。

「おおっ！さすがは我が妹。して、その根拠は？」

強気になった妹に少々驚きながらも、晋は妹に続きを促す。

「はい。ここまで大規模かつ異常な騒動が起こっているにも関わらず、先ほどからパトカーのサイレンが全く聞こえません。このことから考えて、周囲には通報する人がいないのか、もしくは通報しても警察が駆けつけてくれないかのどちらかと考えていいでしょう。それに、もしこの騒ぎが街単位で起こっているのだとしたら、もはや警察では対処のしようがないと思います。しばらくすれば、自衛隊が出張ってくるかもしれませんが……」

綾乃は最後まで言うことはしなかったが、その意図は全員が理解した。

だが、それでも納得いかないのか渡部はしつこく食い下がる。

「そんなことわからないだろっ！？もしかしたら、1時間後か2時間後にも助けにきてくれるかもしれないじゃないか!!」

完全に冷静さを失った渡部の様子に、晋は軽く肩をすくめた。

「だったら、アンタはここに残って助けを待てばいいさ。でも、俺達はここでお別れさせてもらうよ」

そう突き放すように冷たく言い放つと、ゾンビとの格闘に備えて軽い準備運動を始めた。

あんな腐臭撒き散らすグロい化け物などには近づきたくもないが、綾乃を連れて逃げる以上、そうもいかないだろうなあ。

トチ狂った従業員を視野から追い出し、そんなことを考えていた矢先

「こ、この状況で自分達だけ逃げるつもりかよっ！！卑怯者が！」

ピキリ。

渡部のこの言葉に、場の空気が凍った。

晋は目にも止まらぬ速さで渡部の胸倉を掴み、強引に自分の下へ引き寄せる。

「……勘違いするなよ。俺はそもそも妹を助けにきただけだ。あんたらがどうなるうと知ったことじゃない。自分の力で立ち向かおうともしない奴が偉そうに囀るな。何もできないチキンは黙ってずつと震えてろ」

「う……」

怒気を孕み、殺気すらも込められた晋の言葉に、渡部は喉を引きつらせて黙り込んだ。

他の従業員も、晋の迫力に圧倒され、何も言い返すことができないでいる。

ただ一人を除いて。

「お兄ちゃん……言い過ぎ……」

「むう……」

綾乃は、渡部の胸倉を掴んで放さない兄の左腕にそつと手を置いて、言った。
妹に窘められた晋は軽く唸るが、深く溜め息を吐くと、引き寄せていた渡部を開放し、何も言わなくなった。

渡部はバツが悪そうに視線を逸らす。

「行こ。お兄ちゃん」

綾乃は不貞腐れる兄の手を握って店の出入り口に向かい、その手前で振り返った。

「皆さん、今までお世話になりました。私達はここから逃げます
私達が出たら、扉の鍵をすぐに閉めてください」

最後に、バイト中に一番世話になった柏木に尋ねた。

「柏木さん、私達と一緒に逃げませんか？」

「……………」
「そつ……………」

無言のまま視線を逸らす柏木に、綾乃は悲しそうな視線を送る。

「それでは、さようなら。願わくば みんな生きて会えますように」

そして、それだけを言い残し、後はもう振り返らなかった。

「今度こそ出るぞ。準備はいいな？」

「大丈夫。お兄ちゃんと一緒なら」

「よしよし、いい子いい子。 今だ！行くぞ！！」

扉をぶち破るような勢いで飛び出していく二人を見届けた男性従業員は、すぐに扉を閉めて鍵をかけた。

柏木は、なんともいえない表情で晋と綾乃が出て行った扉をじっと見つめ続けた。

後に、この店に残った従業員全員がこの籠城策を後悔することになる。

それは自ら戦おうとしたかったことの報いなのか、それとも。

宛先：読者様 件名：思い浮かばないので無題です

P M 1 8 : 2 9

薄暗い夜道を一台の大型スポーツアラーが猛スピードで疾走していた。

乗っているのは二人の男女。

言うまでもなく、さきほど焼肉店を脱出した晋と綾乃の兄妹だ。

時折、物陰からゾンビが現れるが、バイクのスピードについてこれるハズもない。

「うう……俺のヘルメット……高かったのに」

「あ、あはは……」

綾乃はヘルメットを（ゾンビに向かって投げつけてしまった）無くしてメソメソしている兄の気を紛らわすべく、話題を変える。

「そ、それよりもさっきの蹴り凄かったね。まだ極真空手続けてるの？」

「ん？ああ、空手は黒帯取ったからやめたよ。今は遊び半分でテコンドーやってる」

まだ落ち込んではいえるようだが、とりあえず兄と会話が成立したことに綾乃はホッと胸を撫で下ろした。

「それにしても、綾乃。お前はもう少し周囲に気を配りなさい。…

…お前が化け物に襲われたときは本当に心臓が止まるかと思った」

「うう……」

兄からの手厳しいお叱りに言葉を詰まらせる。
今度は綾乃が落ち込む番だった。

「……うん、気をつける。ごめんね、お兄ちゃん。それから　あ
りがとう」

「ドントマインド、モーマンタイ」

決して背が高いワケでもないが、それでも広くて逞しくみえる兄の
背中を綾乃はじっとみつめた。

晋が家を出てからは会う回数もめっきり減って、今では数年に一度
しか会わない。

メールは時々しているが、実際に顔を合わせたのは実に2年ぶりで
ある。

綾乃からしてみれば、少しは自分も成長したと思う。だが、それ以
上に、兄の背中は大きくなったようにみえた。

綾乃は兄を抱く腕の力を強め、その背中に顔をくっつけた。

特に香水もつけてないのに、相変わらずいい匂い。

生きるか死ぬかの状況で、不思議なほど自分の心が落ち着いているこ
とには特に疑問も抱かず、綾乃は2年ぶりである兄の温もりを満喫
する。

「あれ？綾乃、胸成長した？」

途端に、晋が多少意地悪い感じで口を開いた。

ちらつと振り返った顔から覗いた瞳が、獲物をいたぶって弄ぶ猫の
目に変貌している。

この目つきに嫌というほど覚えがある綾乃は、兄が自分をからかおうとしているとすぐに思い当たり、

「うん。2年もあれば嫌でも成長するよ。今いくつだと思っ？」

「っ！……んなことは知らんがな」

素直に答えることで兄への逆襲に成功した。

一瞬だけみせてしまった動揺を悟られまいと平静を装う晋だが、綾乃はちゃんと感じている。

綾乃は、親しい友人にすら滅多に見せない小悪魔的な笑顔を深めた。

「お兄ちゃん、今照れたでしょ？」

「……照れてない」

「照れたんだ」

「照れてないってば」

「お兄ちゃんの嘘つきい」

「嘘じゃないし！超絶嘘じゃないし！！」

「お兄ちゃんってば、可愛いなあ」

「うわーん！妹が苛めるよー！」

妹の手痛いカウンターに、とうとう泣き出してしまっ晋。

無論、ふざけているだけだが。

「くっ！しばらく見ない間に小賢しくなりおって！！兄を苛め返すとは、なんて妹だ！」

街がこんな状況にも関わらず、兄の代わり映えの無さに思わず綾乃は笑ってしまった。

いつでも自分を護ってくれた、強くて優しい兄。
少し意地悪で子供っぽいところもあるけど、そこがまた可愛かった
りする。

血は繋がってないけど……。

綾乃にとっては、誰にでも誇れる自慢の兄だ。

「お兄ちゃん」

「んー？」

「大好き」

「……うん」

絶望の渦中にいるからこそ、兄妹の絆はさらに深まっていく。

だが それに呼応するように、二人を包む闇はますます濃くなっ
ていくばかりだった。

宛先：読者様 件名：炎の壁は熱いです

P M 1 8 : 4 1

まるで汚染されてしまった大気が絡みつくように、ねっとり生ぬるい風が晋と綾乃を包み込んでいる。

だが、実際はそれだけじゃない。

周囲一帯を残らず焦がしてしまいそんな熱波が荒々しく二人を歓迎していた。

バイクに跨ったまま硬直する晋と綾乃の視線の先には、天まで届けといわんばかりに炎が渦巻いている。

紅い月が冷たく見守る夜道の中で、二人の驚愕した顔が炎にはつきりと映し出されていた……。

「嘘……」

「こいつは……さすがに想定外だったなあ……」

綾乃が震える声で呟く。

晋はといえば、気楽さが完全に抜け切った真顔を隠すように、左手で額を覆っていた。

事の全容はこうだ。

警察署まで繋がっている改装されたばかりの道路を猛スピードで疾走し、警察署まであと僅かというところで

「……ん？」

さながら映画のワンシーンのように、巨大な鉄の塊が轟音と共に姿を現した。

合流車線からタンクローリーが突っ込んできたのだ。

「うおいッ!?なんでこんなところに合流車線が!?!」

警察署まであと少しと気を緩めていた晋と綾乃の顔面が、一瞬で蒼白に染まる。

「ま……まずいつ!?!」

「きゃああつ!?!?!」

接触を回避するため、晋は慌ててブレーキをかけた。

必死にしがみつくと綾乃を振り落とさないようにしながら、右足に位置するブレーキペダルを少し強めに踏み、わざと後輪を滑らせてドリフトの要領で車体バランスを整える。

あわやというところで激突を免れた二人を残し、明らかに正気ではないタンクローリーはガードレールを激しく擦りながらそのまま前進。そして、少し先のガードレール脇に止めてあった乗用車に激突する。

呆然と見守る二人の前で、大きくバランスを崩したタンクローリーは横転し、大爆発、炎上した。

爆発の衝撃波が二人を襲う。

鼓膜を裂くような爆音に、綾乃は咄嗟に耳を塞いだ。

対向車線まで満遍なく埋め尽くした炎は、警察署までの進路を見事に断ち切ってくれた。

ここまで綺麗に分断されると、いっそ清々しい。

「くそ……対向車線まで燃えてるよ。これじゃ回り道するしかないな」

大破炎上したタンクローリーを睨みつけながら、晋は憎憎しげに呟く。

同時に、自分の脳内マップが既に役に立たないことを痛感した。

晋が記憶している街のマップには、合流車線など存在していなかったからだ。

「綾乃、ここから警察署までナビよろしく。俺の土地勘はもう……今の故郷には通用しないっばい」

「うん。任せて」

綾乃は努めて明るく請け負い、悲しげに俯く兄の背を抱きしめた。

早速、頭の中に地図を描き、警察署までの進路を定めていく。

「確か、この辺りはまだ道路の改装が済んでないの。この道を封鎖されちゃうと、警察署まで着くの最低でも20分はかかったっちゃうかも」

「ま、仕方ないさ……。ったく、ホントいいタイミングで突っ込んできてくれやがって……！」

晋が悔しげに唇を噛んだ途端　そこへ怨嗟のような多数の呻き声が聞こえてきた。

慌てて振り返った先には、爆音と炎に導かれたかのように、人であつて人ならざる亡者達が犇めき合っている。

震える腕でしがみついてくる綾乃の頬を軽く撫でたあと、晋はアクセルを吹かした。

「ここで考えてる時間はないな。行くぞ！」
「うん！」

まだまだ悪夢は終わりそうにないようだ。

宛先：読者様 件名：人間のなれの果て

P M 18:57

新鮮な血肉を求めて行進してきたゾンビ共には目もくれず、ご丁寧に警察署への道を綺麗に寸断してくれたタンクローリーから離れて十数分が経過した頃

「……………ねえ、お兄ちゃん」

「なんだい？我が妹よ」

「……………どうしてこんなことになっちゃったのかな？」

「……………こんなことってというのは、この惨状の原因が知りたいって意味か？」

「ううん……………そうじゃなくて。昨日までは、何の変哲も無い日常を送っていたハズなのに……………。どうして？なんで、今、私達は必死に逃げてるの……………？」

「……………」

どうしてこんなことになったのかと聞かれても、ただ巻き込まれただけでしかない晋に綾乃が満足するような答えを返せるはずもない。晋は「さあね」とごく短い返答だけを返し、あとは無言でバイクを運転した。

そんな兄の態度に満足するでもなく不満を言うでもなく、綾乃はただ独り言のようにぼんやりと疑問を口にする。

「街の人たちはなんであんな姿になっちゃったのかな……………」

「……………どうしてだと思っ？」

「……………え？」

兄から回答が返ってくるとは思ってなかった綾乃は思わず聞き返した。

「何が原因でこの街がこんな姿になってしまったのか。綾乃はどう考える？」

「原因……」

「全身を腐食させた”元”人間達の凶行。人が人を喰い殺す惨劇。発端となった事件が発表されたときは、街はまだ平和そのものだったハズだ」

「発端となった事件って……四日前に起こった最初の殺人事件のこと？」

「それ以外に考えつくか？　とは言っても、確定ってワケじゃないケド」

最初の殺人事件って、四日前にあったんだ。知らなかったよ。なんてことは口が裂けても言えない。

晋は内心でそんなことを思いながら、話を続ける。

「その事件が世間に広まるにつれて、こんな噂が出てきた。曰く『喰い殺された人間が蘇って、生きている人間を襲う』と」

感のいい綾乃は、何かを察したように目を丸くした。

「もしかして、それはただの噂じゃなくて……？」

「まあ、結論付けるのはいささか早いケド。あながち間違っではないだろうさ。事実、俺達が目にしてきた”街の住民の皆さん”は、どいつもこいつも生きていられるハズがないほどの重傷を負い、尚且つ全身が腐食していた。まさしくゾンビだな」

「それじゃあ……たったの四日で街がこんなになった原因って……」
「ゾンビ共に喰われた人間がゾンビとなって復活し、他の生きてい

る人間を襲う。これが雪だるま式に増えた結果　と考えるのが利
口かね」

「そんな……」

　　そうでなければ、こんなに短時間で街一つが壊滅するなんて考
えられない。

「なら」

「ん？」

「街がこうなってしまったことはひとまず置いて、この惨事の
発端になった　最初に事件を起こした人がおかしくしちゃったの
はどうして？」

「うーん……現実的に物事を考えるなら、なんかの病原菌　ウイ
ルスの感染による被害って線が濃厚だろうな。例えば、空気感染、
水系感染、接触感染とか」

「仮にそうだとしても、人がこんなになっちゃうウイルスなんて聞
いたことないよ……」

「俺だってそんなの聞いたことないさ。まあ、少なくとも今言える
ことは……」

晋はそこらをつろついているゾンビ達を一瞥しながら言った。

「あいつらに傷を負わされたら、その時は覚悟しなくちゃいけない
ってことだ」

宛先：読者様 件名：明けない夜はない……と思います

P M 19:21

晋と綾乃は道路の端で小休憩を取っていた。

自動販売機から飲み物を購入し、それぞれ口にする。

最初は無理矢理自販機を破壊して中の飲み物を頂戴しようと考えていたのだが、たかだか300円のために貴重な体力を消耗するのもバカらしくなったため、考えを改めた。

日は完全に姿を消し、辺りは闇に包まれ、時折吹き付ける風が木々を微かに揺らしている。

「夜をこんなに恐く感じたのは生まれて初めて……」

綾乃は木々の葉が風にざわめくのを聞きながら、揺れる髪を押さえた。

「大丈夫だよ。どんなに恐くても、明けない夜はない……と思う」

晋は脅える妹を少しでも安心させるように、綾乃の肩を抱くようにして寄り添っている。

「それよりも、問題はこれからどこへ逃げるかだよなあ……」
「……そうだね」

二人は揃って溜め息を吐いた。

さきほど警察署に辿り着いたものの、既にそこには無数のゾンビ達が集結していて、辺り一帯に生きている人間は皆無だったのだ。この状況に絶望して全員逃げ出してしまったのか、それともこの場所は危険と判断して対策本部をどこかへ移したのか。とにかく、警察署が暴徒に占拠されるといふ前代未聞の非常事態が起こってしまった以上、もはやこの街の治安が正常化する可能性は絶望的だろう。

未だに難を逃れている晋と綾乃に残された道は唯一つ。それは、自分達の力だけでこの街から生きて脱出すること。二人には燃料を満タンにしたばかりのバイクがあるし、晋のライダーとしての腕も確かなので、この街から脱出する”だけ”なら大して難しくはない。ただ、問題は【どこへ逃げれば安全なのか】ということだ。

晋は水が入ったペットボトルを片手に持ちながら、静かに息を吐いた。

「ふう……」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

さきほどバイクから降りた際に身体をフラつかせたので、心配させてしまったのだろう。

バイクというのは車を運転する以上に体力と神経を消耗するため、極度の緊張を持続させた状態でハンドルを握り続ければ、身体が参ってしまうのも仕方ないことなのだが……。

「妹に心配されるほど俺の体力は柔じゃないって。……でも、ありがと」

「うっん……私こそ役に立てなくてゴメンね……」

「何言ってるのさ。警察署に逃げ込むことができなかったからって、お前が責任を感じる必要はないだろう？あまり気にするな」

晋はわざわざグローブを外し、綾乃の頬を左手の人差し指と中指で摘むようにしてそつと撫でた。

この世で実の妹と義理の妹にしかみせたことのない、ちょっと変わった親愛の証である。

久々にみる兄の仕草に思わず頬を紅くしてしまったものの、綾乃は少し嬉しそうに微笑んだ。

いつの間にか大人っぽくなったな……。

晋は綾乃の笑顔をじつとみつめながら、ぼんやりとそんなことを思っていた。

ちょっと前まではまだ幼さが残る子供だと思っていたのに、2年会わなかった間にすっかり【魅力的な女性】へと変貌を遂げていた。焼肉店で義理の妹と再開したとき、あまりの変わりように一瞬言葉を失ったほどだ。

ゾンビ共から逃げるためにバイクに乗せたときは、風に乗った綾乃のいい香りに思わずドキツとしてしまった。生きるか死ぬかの最中に妹にときめくとは、我ながらいい根性をしていると思う。

俺は……義理の妹をどういう目でみているんだ？

実の妹がいる晋は、義理の妹である綾乃のことも、同じ家族として平等に接してきた。

血の繋がりとかそういうややこしい事情は一切切り捨てて、純粹な

”妹”として愛してきたつもりだった。それが、いつ、どこで、何をきっかけに義理の妹を異性として意識するようになってしまったのだろうか。

一時の気の迷いであってほしい。

どこか切ない気持ちになりながらも、晋は切実な想いでそう願った。

「お兄ちゃん、そんなにみつめられると恥ずかしい……」

「ん？あ、ああ……ごめ」

兄にじっとみつめられ、耳まで真っ赤に染めている妹の小さな抗議にハッと我に返った晋は慌てて謝ろうとした

ガタンッ！

……のだが、突然の物音と気配に否応なく中断させられる。

咄嗟に綾乃を自分の後ろに庇った晋は、息を殺して気配がする方向を注視した。

先ほどの物音はゴミ箱が倒れた音だったらしい。

ゴミ箱の蓋だけがゆっくりと目の前に転がってきた。

その後を追うように電柱の蛍光灯に映し出された影が近づいてくる。

そして、己の存在をみせつけるようにしてゆっくりと姿を表したのは、二匹の大型犬だった。

元は警察犬と思われるドーベルマンだ。

ただし、その肉体はあちこちが損壊し、腐食している。挟られた脇腹の肉から無様に肋骨を晒し、眼球は白目を向き、爛れた顎の肉からは無遠慮に歯茎と犬歯を覗かせていた。

これぞ、まさしく地獄の番犬というべきだろう。

突然の乱入者に、動揺を隠せない二人。

その中で、必死に恐怖を噛み殺した晋が、綾乃の耳元で静かに囁いた。

「綾乃、落ち着け。合図したらすぐにバイクに跨って、死ぬ気で俺にしがみつくん。わかったな？」

「う……うん」

どうしてこんなところにドーベルマンが二匹も出現したか等の理由は、この際どうでもいい。

今は、二人で生き延びることが最優先だ。

二人と二匹の距離はおよそ15メートル。バイクの進路上に障害物はない。

よし、いける！

なぜか近づいてこようとしないゾンビ犬を刺激しないように、晋はゆっくりとした動作でバイクに跨った。

そして

ドルルウウンッ！！！

『ガウツ!?!』

「乗れッ!?!」

「っ!?!」

静寂した闇夜に響く、バイクのエンジン音と晋の声。

慌ててバイクに飛び乗り、文字通り死ぬ気で兄の背中にしがみつく綾乃。

それに気づいて、鬼気迫る勢いで突撃してくるゾンビ犬。

妹がしがみついたことを確認した晋は、スロットルレバーを遠慮なく回した。

猛回転するタイヤが地面との摩擦熱で煙をあげるなか、晋と綾乃を乗せたスポーツツアラーが爆発的な勢いで加速する。

命を賭けた壮絶な鬼ごっここの幕を開けた。

宛先：読者様 件名：ハイスピードモーターサイクル（謎（前書き））

疾走感のある曲を聴きながら読むと、前半だけはより楽しめると思
います！

ちなみに、私の愛機はKAWASAKIのNinja250Rデ
ィアプロブラックです。えへ。

宛先：読者様 件名：ハイスピードモーターサイクル（謎）

P M 19:33

風に乗って流れてくる亡者達の呻き声以外は、物音すらしない静まり返った街。

平和だった世界は唐突に姿を消し、今はいずこからか現れた【地獄】が顕現するのみ。

そんな永遠に出られないとも知れない地獄の輪の中で、必死に輪の外に飛び出そうともがいている二人の兄妹がいた。

40km/h制限と表示された標識を、軽くオーバーしたスピードで一台の大型バイクが通り過ぎていく。

風圧で道端に捨てられていた空き缶が転がった。

そのバイクの後ろを、二匹の犬が信じられない速度で猛追していく。

例え地獄の釜底に放り込まれても、最後の瞬間まで足掻いてやると誓った二人は、今、二匹の地獄の番犬に追われていた。

「しつこいワンコ共だなっ！」

「人間の動きは圧倒的に鈍くなってるのに、犬は逆に素早くなくなる……」

バイクの時速は優に60km/hを超えている。

その速度に平然と追いつがるゾンビ犬の恐ろしさに、晋と綾乃は戦慄を隠せなかった。

「ハッ！だったら、ブツちぎるだけだッ！」

さらにスロットルを捻る。

エンジンが焼け付くような駆動音をあげ、バイクがさらに加速した。

「きゃあああ!?!」

「しっかり捕まってる!!振り落とされたら死ぬぞ!」

薄暗い夜道 視界があまり利かない状況で、80km/hまで速度があがる。

こんなスピードのなかで誤って振り落とされてもすれば、ゾンビ犬に喰い殺される前に、全身打撲と全身複雑骨折で即死は免れない。

そもそも、一般道路でこんな速度を出すのが間違っているのだが、今はそんなことをいつている場合ではないのだ。

まるで主人の闘志に答えるかのように唸りをあげる四気筒エンジン。焼け付こうとするエンジンを冷却しようと必死に稼動するラジエーター。

ヘルメットを被っていない綾乃は、あまりのスピードに目を開けていることもできなかった。

それは、前で運転している晋のほうが格段に辛いハズなのだが、彼は一体どうやって運転しているのだろうか……。

「今はそんなことどうでもいいんだよっ!!」

「お兄ちゃん!?!誰に言ってるのっ!?!」

「独り言だ!!」

一陣の突風のように加速するバイクに、それに喰らいつかんとゾンビ犬も必死に追いつがる。

すでにスピードメーターは100km/hに達しようとしていた。しかし、今、二人が疾走している道路は、二車線どころか広めの一車線ですらない。いくら障害物や人を轢き殺す可能性が少ないといつても、決して出していい速度ではなかった。そんな状況のなかで、危なげないしっかりとした運転をこなす晋とどこまでも追跡してくる地獄の番犬。

ここまでくると、もはやどちらも化け物だという点では大差がない。

「我が妹よ！！後ろのワンコロの様子はどうだっ！？もう姿は見えなくなっただか！？」

凄まじい風圧で暴れ狂うロングストレートの髪を無理矢理押さえつけ、綾乃は必死の思いで後ろを振り返った。

そして、驚愕に目を見開く。

「まだついてきてるよっ！！少ししか離れてない！！」

「んなつ、冗談だろっ！！？もう100km/h突破してるんだぞ！！！」

いくらなんでもおかし過ぎる。ここまでのスピードを有している陸上生物なんて、地球上ではチーターという肉食動物だけだ。

だが、それとて30秒も走れば体力を使い果たし、激しい疲労で動けなくなる。

しかし、後ろのゾンビ犬共は、十数分間も全力（なのかどうかは不明だが）で走り続けているにもかかわらず、疲労で動けなくなるどころか、さらに加速してきていた。

それだけでも脅威だというのに、まだポテンシャルを秘めていると

いつのか。

晋達の乗るバイクは風を切り裂くように加速し続ける。

荒れ狂う暴風に上半身が吹き飛ばされそうになりながらも、晋は必死に神経を研ぎ澄ませて運転に集中しながら、頭の片隅で冷静に思考していた。

初めから100km/hで走れるなら、こちらが60km/hしか加速していなかった時点で一気に追い詰めることができたはずだ。なぜ最初からそうしなかった？

「……まさか？」

そして、ある可能性に辿り着き、背筋が凍る。

それは、初めて生ける屍共に遭遇したときよりも恐怖するに値する、言葉では言い表せない驚愕を伴っていた。

考えられない。いや、考えたくない！

驚愕のあまりに、思考が停止しそうになった。

だが 現実を認めなければ前に進めなくなる。それは晋と綾乃の死を意味することに他ならない。

確かめるしかない……！！

晋はバイクの軌道を維持しつつ、背中にしがみついている綾乃に向かって叫んだ。

「綾乃！！後ろのワンコロの様子をよく観察してくれっ！！何か変

わったことはないか!？」

「えっ!？ち、ちよっと待ってて!！」

なんで犬を観察する必要があるの？

綾乃は晋が何を考えているのか理解できなかったが、こんな状況で意味もない台詞を吐くほど兄は愚者ではない。

綾乃は再び後ろを向き、じつくりと冷静にゾンビ犬を観察した。

「別にな変わったところなんて特には ……え？」

唐突に言葉が途切れる。

それから、突きつけられた現実恐怖した。

綾乃は兄の腰に回している両腕に力をいれながら、悲鳴をあげるように叫んだ。

「大きくなってる!？追ってくる犬、大きくなってるよ!！」

「やっぱりか…くそっ!！あのワンコ共、徐々に進化してやがるっ…!！」

どこまで進化するのかわからないが、このままでは確実に 殺られる。

どうする!？どうすればいい!？何かこの窮地を打開する方法はないのかっ!？

必死に思考する晋。

そんな兄の焦りを敏感に感じ取り、綾乃は不安そうに晋をみつめた。

そこへ

『こちらは 市役所です！現在、自衛隊と警察が市役所周辺にバリケードを築いています！生存者の皆さんは、何とか市役所まで逃げてきてください！お願いします！何とか、何とか、ここまで生きて辿り着いてください！！』

各地に設置されているスピーカーから少年の声が響いてきた。聞いた人間の心を奮い立たせる、切実な想いが込められた声が地獄に仏とはまさしくこのことだ。

声の主は高校生くらいの少年のように思えたが、そんなことは心底どうでもいい。

「お兄ちゃん！！」

「わかってる！！ナビ頼むぞっ！！」

きつと、今の放送を流した少年は、俺と正反対の性格をしているんだな。もう大丈夫かもしれない……。

晋の緊張を緩ませた、一瞬の油断

「そこを左に曲がって！！」

「っ！？」

晋は綾乃の言葉に、反射的に右へハンドルを切ってしまった。

「そっちは市役所とは逆だよ！？」

「し、しまっ …！？」

心の間が犯してしまった、人生最悪の失敗。

「マ……マジかよ……」

あまりの自分の愚かさ、目の前の視界が真っ暗になりそうだった。自分で自分が信じられない。

光を掴んだと勘違いして、安堵してしまった報いなのだろうか。

「バ、バカか……俺は？　こ、ここまで来て……こんな……こんな……」

自分達が未だに闇の中を彷徨っているという目の前の現実も忘れて……。

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……！。大丈夫……大丈夫だよ……」

静かな水面に落ちる一滴の雫のような温かい声。
暗闇を払う一筋の光。

晋は、自らの腰に回された細く綺麗な腕をみつめる。
命に代えても護ると誓った、愛しい妹の両腕。

そうだ……俺は……妹を……護ると……。

どんなことがあっても……綾乃を護るって約束したのに……！

なのにつ、こんなところで……！！

「こんなところで、俺はああああッ……！！！！！！」

諦めてたまるかあああツツ!!!!!!!!!!

「綾乃!!!!!!」

「お兄ちゃん!!!!!!」

互いの名前を呼び合うだけでいい。
それだけで、二人の意思は通じる。

晋はバイクのブレーキを力の限り握った。

ズシャアアアアツツ!!!!!!

時速100km/hからの急制動に、暴力的なまでの慣性が荒れ狂った。

崩れそうになる車体バランスを、絶妙な体重移動とドリフトのよう
に後輪を滑らせることで受け流す。

8メートルほど地面に黒い軌跡を残し、180度の回転。

スロツトル全開。

前輪が雄叫びをあげるように跳ね上がった。

そのまま勢いを殺さずに突進。

二匹のゾンビ犬が死神となって迫り来る。

「邪魔だああああアツツ!!!!!!!!!!」

兄の魂の叫びを耳にした瞬間、綾乃の目に映る光景全てがスローモ
ーションになる

一匹のゾンビ犬がバイクの前輪に衝突した。
生々しい衝突音が晋と綾乃の鼓膜を刺激する。
飛び散る血と肉片と共に、一匹目の死神は豪快に跳ね飛ばされた。

『ガルアツ!!!』

しかし、跳ね飛ばされた一匹目を踏み台にして、二匹目のゾンビ犬が晋の喉下を目掛けて飛び掛ってくる。

だが、晋はコキュートスを秘めているような氷の眼差しで、牙を向ける死神を睨み据えた。

そして、左手に渾身の力を込めて、その顎にバックハンドブローをぶちかます。

どれほどの力が込められていたのか。

晋の裏拳をまともに喰らったゾンビ犬の頭が、脳髓や眼球を撒き散らしながら吹き飛ばされた。

空中で体勢を崩した死神の爪が、綾乃の細腕を引っかき、傷つける。

「っ　っ!?!」

スローモーションが終わる。

前輪が地面と接触した。

サスペンションが歪み、衝撃を吸収する。

「綾乃っ!!!綾乃っ!!!?大丈夫か!?怪我したのかっ!?!」

「うん。ちよつと腕引っかかれちゃった。でも、血は少ししか出てないし大丈夫だよ」

晋の顔色が雪のような白に変色していく。
死ぬ寸前の重病患者でさえ、ここまで白くはなるまい。

「俺のせいだ……俺が……俺が……！」

晋はまるで精神を病んだ末期患者のように眩く。

それだけ絶望の色合いを濃く反映した、誰もが目を背けたくなるような顔色だった。

綾乃がただのかすり傷を負っただけなら、ここまで取り乱したりはしない。

だが、問題はそのかすり傷を”ゾンビ”となった犬から負わされたのが致命的だった。

もしこのままかすり傷を放置すれば、綾乃は恐らく

そう考えるだけで、晋は自分の心臓を握りつぶされたあげく踏みこじられているような錯覚に襲われる。

「俺が無理矢理突っ込んだばかりに……俺は……俺は一体どうすれば
」

そこへ

「お兄ちゃんのせいじゃないよっ……！」

綾乃の、これまで誰も聞いたことのないような怒声が飛んだ。

その瞳は、静かに兄を見据えている。

それは、全てを承知している冷めた眼差しだった。

「あ、あやの……?」
「お兄ちゃんのせいじゃない。私が傷を負ったのは、ただ運が悪かっただけ」

幼い頃の晋が起こしたイタズラで綾乃の怒りを買ったことは何度もある。

だが、怒った綾乃は目に涙を浮かべながらひたすら黙るだけで、決して怒鳴ったことはなかった。

久々かつ今までにみたことのない妹の怒りの感情に、晋は思わず身を竦める。

「……」
「……」

兄が少しだけ我を取り戻したことを確認した綾乃は、怒り口調から一変し、穏やかに続けた。

「あまり自分を責めないで。例えこの怪我が原因で私の身体がどうにかなくなってしまったとしても、私はお兄ちゃんのことを恨んだりしないよ?」

だって。

「だって、私はお兄ちゃんのことを愛しているもの」

晋の瞳が大きく見開かれる。

私のありったけの想いを込めてこの言葉を伝えたよ。もう大丈夫だよ。お兄ちゃん。

晋は前を向いているので、綾乃はその表情を確認できない。ただ、自分の想い告げたことで、兄の”何か”が変わったことだけは感じ取れた。

「……ごめん、綾乃。取り乱したりして。自分が恥ずかしいよ。みつともないな……兄失格だ」

「みつともなくないし、兄失格でもないよ。そんなこと言う人がいたら、私はその人のことを何があっても絶対に許さない」

「綾乃が怖いよう！」

「うふふふー。私だって言うときは言うんです！」

綾乃は偉そうにふんぞり返った。

それから、立ち直った兄を優しい瞳でみつめ、そっと微笑んだ。

「とりあえず、急いで市役所に向かおう。自衛隊も警察もいるんだし、お前の傷に関しても何かいい薬があるかもしれない」

「うん」

この世界の誰よりも愛おしい兄の温もりを確かめるように、しっかりと抱きしめる。

やっぱりお兄ちゃんって、いい匂いだなあ。

兄の背に頭を預け、綾乃はそっと目を閉じた。

「ところでお兄ちゃん」

「ん？」

「どうやって自衛隊の人たちはここまで来たのかな？装甲車とか輸送ヘリの姿は全然見なかったけど」

「さあねえ……たぶん、そこはツツコンじゃいけないところだと思

「う」

「そうなの？」

「たぶんね」

たとえ地球が滅びることになったとしても、この二人の絆を引き裂くことはこの世界の誰にも出来はしないのかもしれない。

宛先：読者様 件名：ハイスピードモーターサイクル（謎（後書き））

良い子の皆さんは、法廷速度をちゃんと守ってくださいね。

ちなみにスポーツツアラーとは、簡単にいえば長距離ツーリングを快適に楽しむためのバイクです。

先の描写のような運転は到底できるものではありませんので、あしからず。

宛先：読者様 件名：これが現実ですか？

P M 20:11

「驚いたっ！生存者ですか!？」

なんとか市役所に辿り着くことができた晋と綾乃を出迎えたのは、バリエードから周囲を見張っていた若い自衛官のそんな第一声だった。

二人の姿をまるで幽霊か何かのようにみつめている自衛官の様子からして、この市役所に逃げ込めた生存者は圧倒的に少ないということだろう。

「自力でここに辿り着いたのは、たぶんあなた方が初めてですよ」「すみません、話は後でお願いします。妹が”奴ら”に傷を負わされてしまって、治療できる人を探しているのですが……」「それは大変だ……！すぐに医療テントに向かいます。案内します」

話のわかる人で助かった。

内心でそう思いながら、晋はバイクを押して自衛官の男性についていく。

綾乃も、晋の隣に立って歩いていった。

チラリと綾乃の腕の傷を確認する。

大した傷ではないのに未だに血が止まっていない 嫌な予感がする。

「綾乃、傷は痛まないか？」

「うん、平気だよ。血は止まらないけど、もう痛くないし」

「身体の調子はどうだ？どこか異変を感じるところはないか？」

「うん。全然ないよ」

「本当に？」

「本当に」

「本当の本当に？」

「本当の本当に」

綾乃の屈託のない笑顔に、晋はとりあえずこれ以上の詮索を避けた。だが、心配のあまりに、生きている心地がしないのは変わらない。

そんな憂鬱というのも憚られる気分を押し隠しながら、晋は辺りの様子に目を向ける。

放送のとおり、ここには自衛隊と警察の生き残りらしい人物達が色々と忙しそうに動いていた。

ただ、晋と綾乃が通り過ぎる度に、皆一様に目を丸くするのが少々目障りといったところか。

そんなに後から来た俺達が珍しいのか？

「何か、私たち驚かれてるね」

「そうだな。たぶん、自力でここまで来たのは俺達が最初なんだろ」

そんなことを話していると、案内役を買って出た自衛官が立ち止まって振り返った。

「こちらです、どござ」

どうやら医療テントとやらに着いたらしい。

先に綾乃を中に入らせ、晋は適当な場所にバイクを停めてからテントに入った。

「こちらへお掛けください」

綾乃が座っているパイプ椅子の隣に言われるがまま腰を掛けた晋は、控えていた女性の看護師によって瞬く間に注射器で血を抜かれた。綾乃とはいえ、既に血を抜かれた後なのか所在なさに晋をみつめる。

「あの、俺のことはどうでもいい。それより妹をお願いします」

「大丈夫ですよ。今、調べていますから」

穏やかな声でそう言った白衣を着た男性は、採取した俺の血液を変な機械にセットした。

隣にセットされてある血液の容器は、恐らく綾乃の物だろう。

色々とボタンを押した白衣の男性は、機械の蓋を閉じると、一際大きなスイッチを押してから回転椅子を回してこちらに振り返った。起動した機械が、妙な駆動音を鳴らし始める。

「私はここで医療を担当している新井と申します。あなた方は自力でここまで辿り着いたのですか？」

新井の目線は綾乃に向けられている。

なので、晋は綾乃に対応を全て一任することにした。

横から会話にしゃしゃり出るのは、あまり好きではないのだ。

「はい。私達は兄が運転するバイク乗ってここまで辿り着きました」

しっかりと綾乃が受け応えするなか、晋はどつと押し寄せてきた疲れに辟易しながら、目を瞑ってじっと体力の回復に努める。

「凄いですね。途中、おかしくなった住民に襲われたりしなかったのですか？」

「勿論、襲われました。でも、兄が護ってくれたんです」

「ほう。見たところ武器はお持ちでないようですが、途中で捨ててきたとか？」

「いいえ。兄が素手ですべて倒しました」

「す、素手で？本当ですか？」

信じられないとでもいうように目を見開く新井。
というか、実際に信じられないのだろう。

新井の興味が晋に向いた。

自分に向けられた視線を感じた晋は、面倒くさそうに口を開く。

「本当ですよ。俺は空手とテコンドーをやっています、格闘戦には多少の自信がありましたから。ところで……」

ここで初めて目を開いた晋は、絶対零度の氷を思わせる眼差しで新井を無表情にみつめた。

「あなた、正規の医者じゃないですね？」

「……！」

「え？お、お兄ちゃん……？」

唐突に背筋が凍るような敵意を剥きだした兄に、綾乃は混乱した。
新井は視線を逸らし、黙った。

「どうなんだ？」

「どうしてそう思ったんです?」

「……俺は医学なんかまったくわからないし、興味もない。ただ

」

「……ただ?」

「ただ、あなたからは医者というよりも研究者らしい雰囲気が出たものですから」

「……」

「これが理由です。まあ、ただの直感ですが」

黙って様子を見守っていた看護師の女性が、さすがに動揺し始める。

「私は」

「そんなの今はどうでもいいよ」

何か喋ろうとした新井を、綾乃が優しい口調で遮った。

「新井さんが医者じゃないかどうか知ってたって、別に何か変わるワ

ケじゃないんだから」

「ま、それもそうだ」

場の雰囲気の中和した綾乃の微笑に、晋が敵意を消して苦笑しながら肩をすくめる。

それと同時にだっつた。

「ケホッケホッ……」

「っ!」

綾乃の小さな咳に、新井と看護師がすぐさま反応する。

「綾乃っ!?!」

「だ、大丈夫……ゲホッ」

苦しそうに息を荒げる綾乃を用意されていたベッドに寝かし、的確に診察しながら、新井は深刻な顔で呟いた。

「まずい……ウィルスの侵食が始まっている……」

やっぱり。街の人たちがおかしくなったのは、ウィルスのせいだったのか……。

血が滲むほど唇を噛み締め、苦しんでいる綾乃の姿から目を逸らした。

こうなることはわかりきっていた！！とにかく落ち着けっ！！

新井の胸倉を掴んで怒鳴りそうになる自分の焦りを必死に抑え、どうにか理性を保った晋は、暗さを湛えた静かな声音で尋ねる。

「……妹を侵食しているウィルスとやらの特効薬はないんですか？」

「……貴方次第です」

「なんだと？どういう意味だ、説明しろ」

妹が人間でいられるかどうかは自分次第だとわけのわからないことを言われ、怒りのあまり晋の声音が低くなる。

無表情だが、その眼差しは底の知れない闇を湛えていた。

その右手はバスケットボールでも握っているかのような形で固定されている。

バキッ……メキッ……

力を入れ過ぎた右手の骨が、軋みをあげた。
晋が理性を失う、一歩手前の状態だ。

この状態になった晋の理性を取り戻させることができる人間は、家族と極に近い親友達のみなのだが、今、近くには誰一人としていない。

唯一の人物である綾乃は荒い咳を繰り返し、看護師によって介抱されているのだから。

そんな事情など露程も知らない看護師はスーツケースのような金属の箱を取り出し、蓋を開ける。

そこから何かの液体が入った注射器を取り出し、綾乃の左腕に注射した。

「……説明しろと言っている」

「特效薬を作り出せる”状況だけ”は既に整っています。材料もほとんど揃っている」

「ほとんど……？何か足りないものがあるのか!？」

「ウィルスの抗体を持った人間の血です」

「なに……?」

抗体とは、簡単にいえば細菌・ウィルスを体内から除去する糖タンパク分子のことをいう。

このウィルスの抗体を持った人間なんているのか?いや、そんなことより……どうしてこいつはこんなにウィルスのことについて詳しいんだ?

疑問と疑念が晋の心の内に湧き上がるが、今はそんなことを考えて

もどつしよつもあるまい。

「抗体を持つ人間の割合は200人に一人。しかし、今ここにいる人間には　自衛官も、警察官も、生き延びた民間人も……私やその助手も含めて誰一人として抗体が確認できていません」

「妹はウイルスの進行がたった今確認された。だから……あとは俺の血次第ってことか……」

「そうです。ウイルスの進行を遅らせる薬は既にあるが、それでも伸ばせて一日……」

「俺の血液の結果はいつ出る？」

ピーッ！

突然の電子音。

「ちょうど結果ができました」

新井がパソコンのキーボード弄り始めた。

先ほど晋と綾乃の血を入れた機械の結果が、ディスプレイに表示されていく。

「……………」

意味のわからない英数字の羅列が液晶画面を流れていった。

晋は親の仇をみるように、ディスプレイをじっと睨みつける。

そのどれかに妹の運命が書き込まれてるってか！？冗談じゃないッ！！綾乃が何をした！？いつも他人を気遣って、自分のことを二の次にする妹に一体何の罪があるっていうんだよ！？あるなら誰か言ってみるッ！！綾乃が抱えている罪を全部背負ってやる！！

！俺が全部背負ってやる！！だからッ！！！！だから……ッ！！！！

心の中で力の限り叫んだ晋は、地面に力なくへたり込んだ。
祈る神などいない。

でも……それでも、祈らずにはいられない。

俺はどうなってもいいから……誰か……誰でもいいから妹を……俺の妹を助けてください……。身勝手なのは百も承知です。……でも、失いたくないんです。……愛しているんです。兄として、一人の男として……綾乃を愛しているんです。綾乃が助かるのであれば、どんな地獄も耐えてみせます。どんな拷問も耐えてみせます。でも……綾乃がいなくなったら……俺は……。

そして、最後に一列だけ緑文字で点滅する英語が表示され、ディスプレイに全ての結果が表示された。

宛先：読者様 件名：奇跡とはなんですか？（前書き）

晋の視点から物語を描いています。

宛先：読者様 件名：奇跡とはなんですか？

PM 20:28

「や、やった！！ウィルスの抗体です！！これで特效薬が作れるっ
！！！！」

目の前の白衣を着た男が何かを言っている。
名前……何て言ったっけ……？まあ、どうでもいいか。

「喜んでください！！貴方の血から抗体が発見されました！！これ
で特效薬が作れるんですよ！！」

目をキラキラと輝かせながら、何かを叫んでいる。
その様子は本当に嬉しそうで、今にも小躍りしそうだ。

それにしても、ウィルスの抗体？特效薬が作れる？何を言っている
んだ、こいつは。
どうでもいいよ、そんなの。
もう……俺を放っておいてくれ……。

「何を呆けているんですか！？しっかりとしてください！妹さんは助
かるんですっ！！助かるんですよ！！」
「え……？」

こいつ、今何て言った？
妹が助かるっていったのか？妹って誰だよ？俺はそんな名前の奴知
らないよ。

ん……？妹……？

「妹って……誰の？」

興奮が冷めたのか、白衣の男はずれかけていた眼鏡を正すと、一言一言を子供に言い聞かせるようにゆっくりと言った。

「貴方の血から、ウィルスの抗体が発見されたのです。これで全ての材料が揃いました。今すぐ特效薬を作ることができます。貴方の妹さんは助かるんですよ……お兄さん」

「っ!？」

助かるのか？綾乃が助かるのか？聞き間違えじゃないかな？よし、勇気を出して聞いてみよう。

「俺の血で……綾乃が助かるんですか？」

「はい。そのとおりです！」

そう言つて、男は俺の肩を優しく叩いた。

ああ……助かるのか……綾乃。

よかった……よかった……。

「では、すぐに薬の作成にかかります。申し訳ないのですが、しばらく外に出ているらえますか？」

「あ、はい」

咄嗟に立ち上がろうとしたが、足に力が入らない。

やべえ、恥ずかしい。こんなんじゃないかん！

ほら！頑張れ俺の脚っ!!

「よいつしょ……!!」

なんとか自力で立ち上がることができた俺は、いうことを聞かない脚を心の内で叱咤しながら、フラフラとテントの出口に向かった。そのまま外に出ようとして、歩みをとめる。

背中に視線を感じつつ、俺は言った。

「妹を……どうかよろしくお願いします。それと、今までの無礼な態度の数々……深くお詫びします」

「いえいえ、気にしていません。妹さんは任せてください。私が必ず助けてみせます!」

白衣の男 あっ、新井さんだっけ?の力強い言葉を聞いた俺は、今度こそテントを出た。

「ふう……」

空を見上げてみた。

生憎と曇っていて星はみえない。

まあ、曇っていなくてもここから見える星なんて大したことないんだケド。

「よかった……綾乃、助かるのか……」

むう……言葉に出したらなぜか涙出てきた。ここはなんとか我慢しない!

「ん?」

ギリギリで泣くのを我慢したところで、前方から複数の気配が。

暗くてよく見えないが、何やら殺気だっていることだけは把握できた。

その殺気だった集団は、どうやら綾乃と新井さんがいるテントに用があるようだ。

まあ、少なくとも「怪我したので手当してください」って理由じやなさそうだな。

ん？なんだ？何人か鉄パイプ持ってない？

……どうやら、いつまでもヘタレってるワケにはいかないみたいだ。

「おい、お前！そこをどけっ！！」

この格好は……生き残った一般市民か。

「……どうしてさ？」

今、綾乃を助けるために新井さんが頑張っているところなんだ。お前みたいな殺気だった奴を通すワケねえだろ。

「いいからどけっ！！お前、ここにいる奴が誰かわかってるのか！？」

「知らない」

大体予想はついてるけどね。

リーダー格っぽい体格のいい男があらん限りの声で怒鳴ってくる。

うるせえな……そんな近くで怒鳴らなくてもちゃんと聞こえてるよ。もう面倒だからこいつ市民Aでいいか。

「その奥にいる新井って奴はこの街をこんなにしやがった製薬会社の研究員なんだよッ!!」

「ああ……なるほど」

この街を滅茶苦茶にした原因って、例の製薬会社のせいだったのか。ホント、とんでもないことをしてくれたもんだ。

「あいつのせいで街が滅茶苦茶になったんだ!!だから、化け物に喰われていった皆の代わりに八つ裂きにしてやるんだよ!!わかったらそこをどけッ!!!!」

ふゝむ……頭に血が上っているな。ホントに新井さんを血祭りにするつもりか。

まあ、恨む気持ちも理解できなくはないけど、だからといって今彼を差し出すワケにはいかないね。

「少しだけ待ってくれないか？彼は今この街に流行しているウィルスの特効薬を作っているところなんだ。俺の妹が助かるかどうかの瀬戸際なんだよ」

これだけいえばわかってくれる

「そんなの知ったことか!!どかないっていうなら、お前から先に八つ裂きにしてやる!!!!」

ワケないか。

問答無用で鉄パイプを振りかぶってくる市民A。
ただ力任せに振るだけで、構えも何もあつたもんじゃない。
そんなくだらない攻撃に俺が当たってやるとでも思ってるのか？
……ド素人が。

少し頭を下げ、鉄パイプ軽く避ける。

隙だからけの顎元へ、遠慮なく後ろ回し蹴りをかました。

「があつ!?!」

俺の蹴りを顎に喰らった市民Aは、仲間の市民アルファベット多数を巻き込みながら大きく後方へ吹き飛んでいった。

ちなみに、今のは十分手加減した一撃だ。本来の力の半分も出してない。

「こ、この野郎……!!」

おおおお、目が座ってるよ。こりゃあ本気で殺る気だな。
周りの市民アルファベット多数からも殺気が溢れてきてるし、そろそろ気持ち切り替えるか。

俺は頭の中でスイッチを切り替えた。こう力チつと。

「今のは手加減した。でも、次はない。無理矢理ここを通ろうとする奴は俺が殺す。俺に襲い掛かってきた奴も殺す」

殺気じゃなくて”殺意”を込めて、言葉を放つ。

なぜなら、これは嘘でも冗談でもないからだ。

この警告を無視した奴は、全員殺す。

「……この人数相手に素手でタイムン張る気か？」
「関係ない。どちらにしろ、お前らがここを通ろうとするなら全員殺すから」

周りを囲んでいた市民達が俺の殺気に怯み始めている。

ちつ……この程度でオドオドするくらいなら初めから来るんじゃないやねえよ。

「……てめえみたいなに若造に、家族を殺された奴の気持ちがわかるのか！！？ああ！！？」

ふん。家族を殺された者の恨みってやつか。そんなのわかりたくもねえな。

「わからないし、わかりたくもない。でも、ここでお前らを通せば俺は命よりも大切な妹を失うことになる。……そうなるくらいなら」

そうなるくらいなら　　っ！！

「この場が集まっているお前ら十数人を一人残らず皆殺しにしてやる。そうなればウイルスの特効薬が無事に完成して俺の妹は助かるし、この先大勢の人間の命を救うことができる。めでたしめでたしの大団円だ」

例えこの全身を血まみれにしようとも、俺は自分の大切な人を最後まで護ってみせる。

「てっ、てめええええッ！！！！」

完全に逆上した市民Aと、それに触発された数人が鉄パイプを振りかぶりながら突っ込んできた。
ハッ！バカにつける薬はないってか。
仕方ないから可哀想なバカ共にサービスだ。無料であの世に送ってやる。

せいぜい天国で一家団欒を満喫してこいよ。

俺は特に構えもせずに、ただポーッと突っ立った。ただし、右手だけは貫手の形にして。

ほんの一瞬で片をつけてやる。

悲鳴をあげる暇さえ与えはしない。

喉、眉間、動脈、臓器……。知る限りの急所を貫手で一刺し。

それでお終い。

市民達が間合いに入った。

俺は上体を低くして、一気に　　！

ドンッ！！

抜き手で一人目　市民Aをこの世から葬ろうとしたら、ちょうど俺と市民Aの中間あたりに派手な火花が散った。

これ、銃弾かよ。

ふと銃声のあった方向を振り返ってみると、ハンドガンを握っている一人の自衛官を中心に、二人の自衛官がアサルトライフルを持って立っていた。

今の発砲は……真ん中の奴の仕業か。

「いかに一般市民とて、害をなす人間を生かしておけるほど今の我々には余裕がない。次に事を荒立てた奴は容赦なく射殺する」

偉そうな自衛官の鋭い眼光で睨まれた市民アルファベット多数達は、蜘蛛の子を散らすように退散していった。

「お前達は医療テントを見張っている」

「はっ！」

ふむ。威風堂々たる風格。上級士官か？

ま、どうでもいいけど。

「それからその青年。ついてきなさい」

「……」

げっ！お呼ばれされてしまった。なんで俺だけ？

どうしよう。まさか、どこかテキトーなテントの中でアッー！なんてことには……。。

「早くついてきなさい」

なるワケないか。

俺は素直に偉そうな自衛官の男の後ろをついていった。

宛先：読者様 件名：主人公は武器を入手した！

P M 20:40

前を歩く上級士官 菅原の背中をみつめながら、ただ黙って晋は歩く。

どこに向かっているのかはわからないが、騒ぎを起こしてしまった責任を感じているため、特に強く問いただすこともできない。

まあ、後悔も反省もまったくしてないケド。

あの場で引き下がっていたら、今頃、新井の命はなかっただろう。

そうなれば、綾乃を助けることもできなくなっていた。それだけは、何があっても回避しなくてはならない。

晋はそんなことを考えながら、今の状況を整理した。

とりあえず、菅原は少なくとも自分を拘束するつもりはないらしい。もし、そうするつもりならば、わざわざ「ついてきなさい」などとは言ったりしないだろう。

となれば、個人的に何か問いただすつもりなのだろうか。

すると、今まで黙っていた菅原が唐突に口を開いた。

「君、先ほどの民間人をどうするつもりだったんだ？」

いきなり直球だな。

「適当に痛めつけて追い返すつもりでした」

晋は少し迷ったが、とりあえず無難にそう答えた。

バカ正直に「皆殺しにするつもりだった」と答えて、自らの印象を悪くする必要もないだろう。

これが原因で拘束されたら堪らない。

「そうか。私はてっきり、皆殺しにするつもりだとばかり思っていたのだが」

だが、晋の考慮を無視するように堂々とそう言い放つ菅原。

晋は内心で舌打ちした。

こいつ……。

「……嫌だなあ。そんなことしませんよ。俺はそんな人でなしになるつもりは毛頭ありません」

「愛する妹のためならばその覚悟も辞さない、といった感じに見受けたんだがね」

「……何が言いたいんですか？」

晋の瞳が周囲の冷気を取り込んでいく。

その眼差しには、先ほどまでの年上に対する敬いなど消失し、氷のような敵意だけが存在した。

「別に大したことじゃない。ただ、妹のために君がそこまで汚れる必要はあるのか？と問いたいのだ」

晋の殺気を感じていないわけがないのだが、菅原は特に臆した様子もなく淡々と言い放った。

「妹のために汚れようなんて意思はないですよ。ただ、周りの環境がそれを強要してくるだけで」

「違うな。君は、妹のために自分が汚れることを受け入れている。

それは、自ら率先して汚れようとしていることに他ならない」

「……」

言い返す言葉がみつからず、晋は沈黙する。

それに構わず、菅原は話を続けた。

「自分のために血塗れになってしまった兄をみて、妹さんはどう思うだろうね」

「……妹の意思は重要じゃない。俺は、あの子の命を救うためならば何でもする。たとえ、それが原因で妹が俺のことを軽蔑しようとも」

「勝手な言い分だな。傲慢にも程がある」

「俺は最初からそういう人間ですから」

それを聞いた菅原は、初めて歩みを止めて振り返る。

晋を射抜く瞳は、何かを憐れんでいるような眼差しだった。

「君は闇にあてられて盲目になっている。もう一度、今自分が言った台詞の意味をよく考えてみるといい」

「……余計なお世話だ」

「自分を犠牲にした愛は、いずれ哀しい結末を招く」

「……」

再び歩き出した菅原の後に続く晋。

それ以降、二人に会話はなかった。

しばらく黙って歩いていた二人は、何やら物騒な物を色々積んである輸送車の前で止まった。

「凄い武器弾薬の量だな……伊達に日本の盾と豪語しているワケじゃなさそうだ。」

輸送車の前で待機していた自衛官に、菅原が言った。

「これは菅原一佐！何か御用でありますか？」

「この青年に、武器を渡してやってくれ」

「ハッ！了解致しました！」

畏まる自衛官の青年に背を向けると、菅原はさっさと晋を置いて歩き始める。

「一佐って……確か米軍でいう大佐に相当するんだっけ？何でそんな偉い人物がわざわざ俺を……。」

「えっと……とりあえずこちらへどうぞ」

「あ、はい」

晋は考えるのをやめ、とりあえず目の前にいる自衛官の言葉に従った。

「おや？貴方はさきほどの……？」

「え？」

今まで気づかなかったが、晋の目の前にいる自衛官は晋と綾乃を医療テントに案内した人物だった。

よく見ると、その顔はとても若く、恐らく晋と同じ年と思われる。

「あ、医療テントまで案内してくれた自衛官さんですね。先ほどは
どうもありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして。妹さんの様子はどうですか？」

そう聞いてくる自衛官は、どうやら本気で心配してくれているよう
だ。

好感が持てる人物だ。

「おかげさまで、なんとかなりそうです。今、新井さんがウィルス
の特効薬を作ってくれています」

「おおっ！ウィルスの特効薬ですか！それは凄い」

晋は、この市役所に着いてから初めて笑顔を浮かべた。

「あ、すみません！会話に夢中になっちゃって。とりあえず……よ
いしょっと。これをどうぞ」

そう言つて自衛官が輸送車の積荷から取り出してきたのは、アーミ
ーナイフ、四つのマガジンポーチが付属したホルスターとSIG
P226だった。

「あれ？これって自衛隊で使われている拳銃じゃないですよね？」

「よくご存知ですね。それは警察の方々が武器庫から持参してきた
物ですよ」

「むう………そういえば一般の警官に混じって、全身黒い防護服に身
を包んだどこかの特殊部隊のような人達がわんさかいたような……」
「そこは深くツッコんではいけません」

それにしても、国民を護るべき立場にある自衛官が、護る対象

である民間人に銃を手渡す日が来ようとは。どうしようもなく世も末だな。

「そんな目で見ないください……。こちらとしても心苦しいんですから」

「あつ！いえ、決してそんなつもりは……すみませんでした」

悲しそうに目を伏せる自衛官に、晋は慌てて謝罪した。

別に自衛官に悪印象を抱いていたワケではないので、本気で申し訳なく思ったのだ。

「お気になさらず。所詮は、国民を護れなかった自衛官ですから。ところで、銃を撃った経験はありますか？」

「去年、ハワイ旅行にいったときに、一度だけ」

「そうですか。なら、ある程度の心構えはありますね。でも、一応扱い方の説明はさせてください。中略 以上になります」

「わかりました」

晋はジャケットを一旦脱いで、アーミーナイフを左胸辺りに装着した。それから、P226のセットを貰い受けると、早速ベルトと一緒に装備する。

ホルスターからP226を抜いて、手触りを確かめた。

ロックを外してからスライドを引き、弾丸を装填する。

「手馴れてますね」

「ああ……ちよつと恥ずかしいんですが、高校生のときにこれと同じモデルのガスガンを買ったんですよ。まさか、実物を手にすることになるとは思いませんでした」

「なるほど。……実は僕もガスガン持ってました」

お互いの暴露話に軽く笑いあう二人。

それは、同世代の友人を得たときの和やかな笑みだった。

「あ、それから……どっこいしょつと。どれでもお好きなものを選んでください」

「む？」

おじさんくさい掛け声と共に自衛官が別の輸送車から用意したのは、明らかに自衛隊が持参したものではないと思われる銃器の数々。

アサルトライフルからショットガン、サブマシンガンにスナイパーライフル、グレネードランチャーまである。

「オイオイ……さすがにこれは……こんなものどこから？」

「えつと、規則により口外できないので何とも言えないのですが、すべて押収品です」

「え？もしかしてこの輸送車一台分全部？」

「はい」

どこから押収したんだよ、こんなモノ……。

さすがに晋もこれには呆れたが、状況が状況だ。貰える物が貰っておくに限る。

「うん……まさしく選り取り見取り。てか、このミニミとかどう考えても一人で扱える代物じゃないだろ……」

何だかんだブツブツと呟きつつ色々物色した結果、晋が選んだのはアサルトライフルH&K G36Cだった。

威力も高いし連射も利く。何よりこの銃はとても軽いの魅力だ。

自衛官から専用のマガジンポーチを受け取り、腰の後ろあたりに引っ掛けた。

「むう、さすがに腰が重くなってきたな」

「私服では色々と限界がありますからね、当然でしょう。あ、そのライフルはこのケースに隠して持って行ってください」

「わざわざケースに入れるんですか？」

晋が銃を渡されたということは、他の生き残った市民も当然貰っているだろう。

いくらアサルトライフルが目立つとはいえ、わざわざケースで隠す理由がわからなかった。

「実は、他の市民の方々には拳銃だけしか渡していないのです」

「む………？」

「下手にサブマシンガンやらアサルトライフルを持たせた状態でパニックになられたら、こちらが危険ですから」

なるほど……パニックに陥った市民が無闇に乱射したあげく同士討ち、なんてことになったらさすがに笑えないもんな。でも……。

「それを言ったら、俺だってパニックにならない保障なんてありませんよ？」

「貴方なら大丈夫でしょう。何せ、自力でここまで辿り着けたくらいなんですから」

「バイクがなかったら、どうなってたかわからないですケドね……」

というより、今頃死んでるかど。

とりあえず、晋はG36Cを専用のアタッシュケースに仕舞った。

パチンと小気味良い金属音をたてて、ケースのロックが閉じられる。それから、脱ぎっぱなしだったジャケットを着た。

「本当は使わなくて済むのが一番なのですが、いつ”奴等”が現れるとも知れませんか」

「そういえば、こちらへんはゾンビ見ませんね」

「ええ、市役所に立て籠もる際に、辺り一帯のゾンビやら犬やらは排除しましたから」
「なるほど」

できるなら、これらを使わなければならないような事態は起きてほしくないものだ。

そう思いながら、晋はアタッシユケースを手取る。

「あと3時間ほどで輸送ヘリの第二陣が到着する予定です。それまで、身体を休めておくといいでしょう」

「はい、ありがとうございます」

そう礼を返した晋は、綾乃が治療を受けている医療テントへと引き返した。

そういえば、医療テントを襲おうとした連中……銃は所持していなかったっけ。自分達の手で直接始末をつけたかったのかな。

「まあ、今更どうでもいいか」

宛先：読者様 件名：あら、大胆なことで（前書き）

綾乃視点で物語を描いています。

宛先：読者様 件名：あら、大胆なことで

21:12

真っ暗だった世界が徐々に光を取り込んでいく。

うう……眩しい。

「気がつきましたか？」

「あ……新井先生……」

なんでベッドに寝かされているのだろう……寝起きのときみたいに思考が安定しない。

「貴方は今まで昏睡状態に陥っていたのですよ」

「……どうしてですか？」

「腕に負っていた傷からウイルスが感染したのが原因です」

ん……ようやくぼやけてた頭が回復してきた。

ウイルス？感染？

……うそ。

「まさか……そのウイルスって……」

「はい。この街を壊滅に追い込んだ原因です」

そのウイルスのせいで昏睡状態に陥っていたという事は……つまり、私は……。

「もしかして、私ってもう人間じゃないんですか？」
「プツ……アハハ！安心してください、人間ですよ」

新井先生は一瞬ポカンと呆気に取られた表情をした後、盛大に笑い出した。

目尻に涙まで溜めている。

むう……真剣に聞いたのになんで笑うの？
言い方が悪かったのかな？

私の膨れっ面に気づいたのか、新井先生は慌てて態度を改めた。

あつ、先生っていうのは私が勝手にそう呼んでいるだけで、実際は先生かどうかわからない。

「ただし、非常に危ないところでした。貴方が助かったのは、お兄さんのおかげとしか言いようがありません」

「え？」

「貴方に投与した特効薬の最後の材料は、貴方のお兄さんの血から出来ているんです。ウイルスに対する抗体を持っていた唯一の人間である……ね」

「それって……」

私は新井先生からありのままの全てを聞いた。

特効薬を作るのに、ウイルスの抗体を持った人間の血が足りなかったこと。

そして、この場にいるお兄ちゃん以外の全員が、抗体を持っていなかったこと。

つまり、私は最初から最後まで、お兄ちゃんに助けられっぱなしだったということ。

泣きそうになった。

お兄ちゃんは、ちゃんと約束を果たしてくれたんだ。危うく人間ではなくなりかけていた私を、この世界に繋ぎとめてくれたんだね。

新井先生から最後に聞いた話は、お兄ちゃんは抗体の持ち主だからウイルスに感染しないということと、特效薬によって抗体を得た私も、もうウイルスには感染しないということ。

正直、今はそんなことはどうでもよかった。

今すぐお兄ちゃんに会って、私の無事を伝えて安心させてあげたい……というのは建前で。

ホントのこと言うと、お兄ちゃんが傍にいらなくて少し不安なのだ。

私は先生と看護師さんにお礼を伝えると、医療テントを飛び出した。

「……綾乃？」

いた！

「お兄ちゃん！」

外で待っていたお兄ちゃんに駆け寄り、思い切り飛びついた。

周囲に人はたくさんいたけど、そんなのまったく気にならない。

お兄ちゃんは手に持っていたアタッシューケースをその場に放り投げ

て、飛び込んだ私をしつかり抱きとめてくれた。

ふう……やっぱりお兄ちゃんに抱きしめてもらうとホッとするう……。
ん……いい匂い……。

「あ……綾乃、もう大丈夫なのか!? 気分は悪くないのか!？」

「うん。先生に薬を注射してもらったから、もう大丈夫だよ」

「そうか……よかった……本当によかった……!！」

「……心配かけてごめんね、お兄ちゃん」

もう決して離さない。

そういわんばかりに私を抱きしめる腕に力を入れてくるお兄ちゃん。私はそれに応えるように、お兄ちゃんの腕の中で身を委ねた。

私達の間だけ、ゆっくりと時間が過ぎていくように感じる。

お兄ちゃんの静かな鼓動と体温が、私の心と身体を温めていった。

なんて温かいんだろう。

そう思いながら、再びこの腕でお兄ちゃんを抱きしめることができ
た幸せを噛み締める。

そこへ、頬に冷たい感触が弾けた。

はて、なんだろう? 雨かな?

お兄ちゃんの胸に顔をうずめていた私は、そっと顔をあげた。

そして、目の前に映されたのは、目を閉じたまま静かに泣いている

お兄ちゃんの姿だった。

「お兄ちゃん……どうして泣いているの？」

理由なんか聞くまでもないのに……。

でも、私はお兄ちゃんから直接聞きたかった。

貴方は、誰のために、どうして涙を流しているのかを。

「お前が助かって……嬉しいからに……決まってるだろ……」

私の胸に温かい”何か”が溢れてくる。

うん、この言葉が聞きたかった。

私に対して背中を見せるだけだったお兄ちゃんが、私のために振り返ってくれている。

私には同い年の姉がいる。それは、お兄ちゃんの実の妹である存在だ。

ずっと羨ましかった。私よりもずっと自然に「お兄ちゃん」と呼び慕い、気安く近づけることが。

私ももっと近づきたかった。姉のように……もしくは、姉以上に。

お兄ちゃんは優しくかったから、血の繋がっていない私のことも、実の妹のように可愛がってくれた。

姉と同じように扱い、接し、触れてくれた。

姉と一緒にあって悪戯し、困らせて……。

一緒に遊んで、おやつを奪い合って、喧嘩して　。

でも、足りなかった……足りなかったの。

そして、お兄ちゃんが都心の高校に入学して、一人暮らしを始める
って聞いたとき 私は初めて自分の想いに気がついた。
でも、妹が兄を好きになるっていうのは、世間体があまり良くなか
ったから今まで我慢して隠してきた。

例えば、バイトの先輩に勘付かれたときは、しらばっくれてみたり、
誤魔化したりして。

おかげで、自分の想いに気がつけずにいる可哀想な子扱いされちゃ
ったケド……。

それでもなんとか耐え忍んできた……。

けど……もう……我慢できない。

ずっとお兄ちゃんの傍にいたい。ずっと寄り添っていたい。ずっと
抱きしめていたい。

してほしいことがいっぱいある。

してあげたいこともいっぱいある。

ついでに、私のことを妹じゃなくて一人の女としてみてほし……

ずっと一緒にいてくれるなら、妹のままでもいいかな。

とにかく、私はお兄ちゃんを独占したい！

だから……私は

「私は……ここにいます……」

あえて公衆の面前で、義理の兄の唇を奪った。

宛先：読者様 件名：宛先長すぎたかな（前書き）

題名と本文は一切の関係がございません（オイ

宛先：読者様 件名：宛先長すぎたかな

P M 21:21

晋は自分の唇に触れる、柔らかい感触の正体が何なのか理解するまでにたつぷり数秒はかかった。

自分の左頬に添えられている細く綺麗な右手が、とても儂くみえる。

なぜ、妹の顔が弩アツプで俺の視界を埋め尽くしているのでしょうか？

思わぬ事態に脳が対処できず、フリーズしていた。

それに伴い、身体が硬直し、まともに動かすことができない。

周囲の人間からは小さく野次と妬みの声が聞こえてくるが、もちろん右耳から左耳へ抜けていった。

それから数秒か数十秒かあるいは数分か。

晋が観念して目を瞑ってからしばらくして、綾乃の柔らかく整った唇が離れていった。

目を開けると、頬を紅潮させながらも、満面の笑みを咲かせている妹がいる。

ああ……敵わないな……。

義理の妹の笑みの前にあえなく撃沈されてしまった晋は、

「公衆の面前で大胆なことをしてくれた礼だ。存分に受け取れ！綾乃ッ！！」

せめてものお返しとばかりに綾乃の頭を滅茶苦茶に撫で回したあと、そのまま両手でガツチリとホールドしたあげく、頭をブンブンと勢いよく回した。

「はわあああああつ！？ゴ、ゴメンナサイ~~~~！！」
「よし、許す！」

ピタッと腕を止めた晋は、反省を口にした妹を開放した。

綾乃は上下左右に揺れる視界&フラフラと覚束無い足取りを安定させようと必死に抵抗している姿が笑える。

そのまま回復してもらっては面白くないと感じた晋は、さらに片手で軽く綾乃の頭を揺すった。

「うつ！？ちよっ！？謝罪は受け入れてもらえたんじゃっ！？」

「うむ。でも、まだ俺の頬は熱々なもんでね。ちよっど割りに合わないかなあ」と

「うう……酷い……」

綾乃が上目遣い&涙目で訴えるが、晋には全く効果がない。

そんなこんなで何とも微笑ましいホームコメディを展開しているところへ、一人の男が声を掛けてきた。

『君！』

「ん？」

振り返ると、そこには市民Aが。
先ほどと違って鉄パイプなどの武器は所持していないし、殺気立ってもない。

「さつきは本当にすまなかった!」

「あ、さつきの……」

開口一番に謝罪を口にする市民Aに戸惑う晋。
それに構わず、市民Aは頭を下げ、謝罪した。

「俺達は……自分勝手な怒りで、危うくこんな可愛い妹さんの命を奪ってしまうところだったんだな……。君が私達を殺してまで護ろうしていた理由がよくわかったよ」

「いや、もう済んだことですし。別にもう気にしてませんよ。俺のほうも、暴言の数々、大変失礼しました」

「いや、お互い様さ……。本当にすまなかった。どうか妹さんと幸せな家庭を築いてくれ」

「はい、わかりま……。え、いや、ちよつと!?!」

最後にとんでもないことを言い残して、市民Aは去っていった。しかもニヤニヤと笑みを浮かべながら。

あれ?俺って謝罪されたんだよな?

危うく頷きかけた晋は、それを呆然と見送ることしかできない。

「何があつたの?」

「いや、実はさ」

事情を理解できていない綾乃が首を傾げる。

晋は、綾乃が医療テントに籠っていたときに起こった出来事を説明した。

そして、一部始終を知った綾乃は、意地悪い笑みを浮かべながら言った。

「お兄ちゃん……。幸せな家庭を築こうね。子供は最低三人は欲しいな」

「お前も調子に乗るんじゃないぞ！」

「とか言いつつ、実はまんざらでもないんでしょ？」

「……憎らしい台詞を囀るのはこの口か？」

「ふひゃっ！いひゃいよー！」

晋は綾乃の両頬をつねってこね回す。

綾乃は必死に逃げようともがくが、力で兄に敵うはずもない。

「ほれほれえ。調子に乗った分のツケは払って　ん？」

しばらく綾乃の頬つぺたを弄り回していた晋は、そのままの姿勢で唐突に固まった。

突然動きを止めた晋を不審に思った綾乃が、兄の手を頬から剥がして後ろを振り返る。

「新井先生？」

医療テントにいるはずの新井がなぜかこちらに向かってきていた。

「ああ、いたいた！ウィルスの抗体を持つお兄さん！」

「長いなオイ」

駆け寄ってきた新井に、晋は顔を顰める。別に新井を嫌っているというワケではない。

ただ、もう用は済んだハズの新井が、なぜこちらに声を掛けてくるのか。

どうにも嫌な予感がしたからだ。

「貴方の血を貰い受けにきました！」

「お断りします」

「そ、そんな!？」

晋は綾乃を連れてその場から去ろうとする。

焦った新井は、慌てて晋の肩を掴んで引き止めた。

「お願いします！特效薬を作るのに貴方の血が必要なんです！」

「それならさつき献血したでしょう？今更血を抜き取られるのはゴメンですよ」

「そこをなんとか！せめて前線で命を張って頑張っている自衛官さん達の方だけでも！」

「む……」

そう言われてはさすがの晋も無下にすることはできない。

俺が血を譲らなかつたばかりに、身体を張って市民を護っている自衛隊の隊員がゾンビに噛まれて（以下省略）っていうのはさすがに気分が悪いしな……。

「わかりました……さくつと終わらせてください」

「もちろんです！ささっ、こちらへ!！」

ズルズルと医療テントに引き摺られていった晋は、そこで自衛官の

分の特効薬&生き残った警察官の分の特効薬&生き残った市民の分の特効薬を作成するために、必要以上の血を抜き取られた。

「あれ？自衛隊の人たちの分だけしか特効薬を作らないんじゃないかな？ たっけ？」

「え？そんなこと言いましたっけ？」

「なっ！？ちよっ！！！ら、らめ————！！！！」

晋の絶叫が医療テントを揺るがした。

「特效薬を作成するために」と大量に血を抜かれたあげく、今までの疲労も相まって顔色が悪くなってしまった兄を休ませようと、綾乃は晋の肩を担いで市役所の中に入った。

一階のフロアは自衛隊が設置した機械やら何やらで色々とゴチャゴチャしていたので、二人は吹き抜けになっていて二階へと移動する。しかし、二階の休憩所には他の生き残った市民達が場所を占領していたため、身体をゆっくり休められるスペースがなかった。

仕方なく、綾乃は奥の通路を渡り、応接室と書かれた場所に晋を連れていく。

「よく……応接室なんて……みつけられたな……」

「うん。ここには小学生の時に一度だけ社会見学にきたことがあったから」

「ああ……そういえばそんなのあったっけ……。俺も行きかけたんだよなあ……」

綾乃は小学生の頃に社会見学で市役所を訪れたことがあり、大体の部屋を見学した経験があったのだ。

ちなみに、晋も綾乃と同じ小学校の出身だが、社会見学の日に高熱を出して休んでしまったため、市役所の構造はよく知らない。

「まさかこんな形で社会見学が役に立つ日が来るなんて、夢にも思わなかったけどね」

「……だろうな」

いざというときに自衛官の声が聞こえないと困るので、扉は開けっ放しにしたまま部屋に入る。

綾乃は持っていたアタッシユケースを目の前のガラステーブルに置いた。

晋を大きな黒いソファに座らせ、綾乃も隣に座る。

ソファにぐったりと座った晋は、力なく頭を背凭れに預けた。

「せめてものお礼とお詫びです」といって、新井がビタミン栄養剤を入れた点滴をつけてくれたのだが、逆にそれが痛々しい光景を演出している。

「……さすがに……疲れが溜まった状態であんなに血を抜かれると

……辛いな……」

「あ、そうだ！」

そこで何かを思い立ったのか、綾乃は座っていた位置をソファの端っこにずらすと、自らの膝を叩いた。

ポンポン。

綾乃の行動が何を意味するのか瞬時に理解した晋は、気恥ずかしさからやせ我慢して言った。

「いや……平気だよ」

ポンポン。

「大丈夫だから」

ポンポン。

「あの……」

ポンポン。

「人の話聞いて」

ポンポン。

「負けたよ……」

妹の執念に降参した晋は、ゆっくりと身体を横に倒す。

それを迎えるように、綾乃は兄の頭を自らの膝に乗せた。

柔らかい感触が晋の頭を包み込んだ。

「感想は？」

「ノーコメント」

兄の耳にそつと息を吹きかける綾乃。

「ひあぁっ!？」

思わず変態的な悲鳴をあげてしまった晋は、羞恥に顔を紅くした。

「コホンッ 感想は？」

「……気持ちいいです」

「素直でよろしい」

満足げに頷いた綾乃は、晋の頭を優しく撫でる。

「むう……」

視界が徐々に霞んでいく。

何だかんだいって体力が限界にきていた晋は、そのまま意識を失うように眠りに陥った。

眠った兄を慈母のような微笑みで見つめる綾乃と、安らぎを得た子供のような寝顔をみせる晋。

現在の時刻は午後十時零分。

焼肉店を発ってから約3時間半。

今まで生きてきた人生の中でもとびきり濃厚な一瞬を駆け抜けた二人は、ようやく安息を手に入れた。

その安息すらも、一瞬で終わってしまう運命にあるとは知らず……。

宛先：パソコンr携帯の前の読者様 件名：別れは辛いものです

P M 23:20

生き残った市民を護送するための輸送ヘリが到着したということ、晋と綾乃の二人は市役所に隣接した駐車場に待機していた。周囲には同じように生き残った市民合わせて約50名が思い思いの場所で輸送ヘリの到着を待っている。

市役所の周りには重層なバリケードが展開されており、ゾンビが入してくると思われる箇所には重機関銃を積んだ装甲車に、あまり見たことがない小さな戦車（装甲戦闘車というらしい）が配置されていた。

各所では全身フル装備の自衛官やスペシャルでアサルトな警官さん達がショットガンやらサブマシンガンを持って警戒にあたっている。その人数は双方合わせて200人前後。

ここまで重武装な人達がいれば、さすがにそう安々とバリケードが突破されることはないだろう。

一時間と少しの睡眠と点滴のおかげで顔色が良くなった晋は、G36Cが仕舞われているアタッシュケースをブラブラと手に持ちながら、綾乃と共に輸送ヘリの到着を心待ちにしていた。愛するバイクをこの場に置き去りにしてしまうのは、とても心苦しく思わず泣いてしまいそうなくらい悲しいが、背に腹は変えられない。

どうやらアタッシュケースの中身をさらすことはなさそうだが、うまくいけば、このままお持ち帰りできるかもしれないな。

アタツシユケースをみつめながらにんまりと笑みを零す晋に、綾乃は怪訝な顔を見せる。

「お兄ちゃん、ずっと気になってたんだけど、そのケースの中身って何が入ってるの？」

「んー……お前は知らなくてもいい代物」

「……」

「まあ、そつ気にするな。おつ、へりの音がする」

じつと睨んでくる綾乃の視線を受け流した晋は、闇に染まった夜空を見上げ、音の根源を探す。

しばらくして、闇の中から徐々に姿を現したのは、プロペラが前後に二つくっ付いた大きなへりだった。

何やら機体下部に、大きなコンテナをぶら下げている。

さらに、左右を二機の小型へりに護衛されているようだ。

もしかして、あれってアパッチか？

「おお、なんか凄いな」

「迫力あるね」

ふと周囲を見回してみると、他の市民も全員同じ気分なのか、輸送へりの一団に釘付けになっている。

『市民の皆さん！急いでこちらへ整列してください！』

声を張り上げる自衛官。

市民達は言われた通りに整列を始めた。

それをみた晋は、一人眉をひそめる。

「むう………輸送ヘリの積載人数って何人までだ？」

「………え？」

「いやさ、今ここにいる人数って軽く見積もっても40人以上いるだろ？ちゃんと全員乗れるのになって思ってたさ」

「もし乗れなかったら、また二人でバイクに乗って逃げなくちゃね」
「俺は血をありったけ提供したんだぜ？無理言ってもお前だけは乗せるよ」

これを聞いた瞬間、綾乃の表情が一気に険しくなった。

「………そんなの絶対嫌だから」

「………」

輸送ヘリが駐車場の上空に到着した。

それを見届けた戦闘ヘリ二機は、いずこかへ散開していく。
輸送ヘリがゆっくりと降下し、まずはコンテナを降ろした。
待機していた自衛官十数人が、迅速にコンテナを回収し、運んでいく。

周囲に障害物がないことを確認した輸送ヘリは、今度こそ地上に降下した。

輸送ヘリのローターが巻き起こす凄まじい風圧に、市民達は目を開けていられない。

着陸した輸送ヘリの後部ハッチが開き、中から完全武装の自衛官が次々に飛び出してきた。

その数は実に30人。

つまり

「なるほど、このへりの積載人数は30人か……」

市民たちが今か今かとへりに乗る機会を窺っているなか、晋一人だけが冷静に状況を把握していたところへ、一人の自衛官が駆け寄ってきた。

「我々にウィルス特効薬に必要な血液を提供していただいたため、貴方には優先権が与えられています！さあ、どうぞ！」

むう、新井さんが手を回してくれたのかな？何にしてもありがたい。

「そういうことなら遠慮なく。よし、いくぞ綾乃」

「うん」

「あ！ちよつと待ってください！」

「は？」

「優先権が与えられているのはあくまで貴方だけです。残念ですが、お連れの女性は……」

「ちよつと待てッ！」

「お兄ちゃん！私はいいから、先に乗って？」

優先的にへりに乗れるのは晋だけだと言われ、思わず激怒しかかる晋を綾乃が宥める。

「優先権とやらを破棄します。どうぞ他の人達から乗せてあげてください」

「は？いや、しかしですね……」

「ゴチャゴチャ抜かしてないで、さっさと市民を乗せろッ！！！」

「はっ、はい！」

晋の怒声に圧倒された自衛官はそそくさとその場を去り、市民達を輸送ヘリのハッチへ誘導を開始した。その時だった。

『イーグル1より通信！南西と北東よりウィルス感染者の大群を確認ッ！数は……計測不能！？このままでは、あと十分足らずでこちらに到達します……！』

その声と同時に遠方から爆音が轟いた。

恐らく、例の攻撃ヘリがミサイルで感染者の進行を妨害しているのだろう。

一気にパニックへと陥った市民達が、順番を無視して我先にと輸送ヘリに乗り込もうとする。

それを数人の自衛官が必死になって抑えようとしていた。

『子供と女性が優先です！！子供と女性を優先させてください！！』

その光景を一步後ろから冷めた瞳で眺める晋と綾乃。

押し合い圧し合い、転んだ人間を踏みつけて、横から割り込もうとする人間を殴り飛ばして……生きた人間同士の醜い争いを黙ってみつめている。

「このタイミングで攻めてくるなんて……ゾンビの奴等も空気読みすぎだろ……」

「お兄ちゃん……」

「何も言っな。これが人間ってモノさ」

「……ん」

輸送ヘリに市民をギリギリまで押し込んだ自衛官達は、最後まで事態を見守っていた晋と綾乃に向き直った。

「お待たせしました！お二人が最後です！あなた方の非常に冷静な対処、感謝致します！！」

大声を張り上げて敬礼する自衛官の男性。

醜い闘争を繰り広げた市民達への皮肉が大いに込められていた。

自衛官に苦笑いを返して、確保されたスペースに二人は乗り込む。

そして、いざハッチが閉まろうとしたところで

『ま、待ってくれー！！』

遅れたらしい三人の家族が駆け込んできた。

ようやく逃げ出せると思ったところに『待った』をかけられ、市民達の冷たい視線が集中する。

その様子に辟易しながらも、なんとか三人が乗れるように場所を詰める晋と綾乃。

だが

「申し訳ありませんが、これ以上は乗せることができません！」

女性と子供を乗せたところで、自衛官が立ち塞がった。

限界まで詰めたが、最後の男性一人を乗せられるだけのスペースが確保できなかったのだ。

『あ、あなた!?!?』

『いやーッッッ!?!?!おとうさあぁんッ!?!?!』

泣き叫ぶ母親と、父親に向かって必死に手を伸ばす女の子。

よく見ると、ヘリに乗れないでいる男性は、数時間前に医療テント前で晋に謝罪してきた市民Aだった。

なんとか自分も乗ろうと頑張る父親に対し、遂に痺れを切らした他の市民の罵声が飛ぶ。

『さつさと諦めるッッ!?!俺達を殺す気か!?!!』

『そいつをさつさとブツ殺して、ハッチを閉めてくれ!?!』

他人が犠牲になっても自分だけが助かればいいという身勝手な思考そんな光景を目の当たりした晋は、焼肉店で自分が言った台詞を思い出し、恥ずかしくなると同時にとても悲しくなった。

『絵里!!香奈を頼んだぞ!?!』

『あなた!!あなた!?!?!』

『おとうさあぁんッッ!?!?!!?!』

『早くハッチを閉める!?!!』

『そいつを放り出せ!?!』

阿鼻叫喚の地獄絵図。

これが人間という生物の本質だ。

それに我慢出来なくなった晋は、

「俺の代わりにその人を乗せてやってください」

自ら輸送ヘリを降り、市民Aに命の権利を譲った。

「君は……！」

「さ、早く乗って」

狼狽する市民Aを無理矢理ヘリに乗せる。

それを見た綾乃が驚愕し、自分も兄と残ろうと身を乗り出した。

「お兄ちゃんツ!? なら、私もっ!!!」

「お前はダメだ。ヘリに乗っていなさい」

晋の真意を把握した自衛官達が綾乃を力づくでヘリに押し込んだ。

綾乃は半狂乱になって何とかヘリから降りようとするも、大人の男性数人相手では為す術もない。

「いやああああっ!!! お兄ちゃんツ!? お兄ちゃんツツ!!!」

とうとう南のバリケード付近で銃撃が開始された。

ウィルス感染者の大群は刻一刻と近づいてきている。

「いやあ……いやあ……私も残りたい……お兄ちゃんの傍にいたいよう……!!」

「綾乃……」

泣いて、喚いて、叫んで、疲れ果て……嗚咽を漏らしながらもそう訴える綾乃。

晋は、そんな義理の妹の頬を右手でそっと撫で上げ

「……………」

その唇を自らの唇で包み込んだ。

数秒の時間が流れ、晋はゆっくりと唇を離す。

そのまま、大人しくなった綾乃をそっとへりの中へ押し込んだ。

「じゃ、またな。お袋ともう一人の妹によろしく」

「お兄……………ちや……………」

ガチャン！

ハッチが閉められ、ローターの回転速度が増していく。

そして、完全に上空へと飛び立った輸送へりは、生き残った市民と綾乃を連れて闇夜へと姿を消した。

輸送へりの中で、綾乃はひたすら嗚咽を漏らす。

その様子を気まずそうにみつめる周囲の人間。

綾乃は、兄がへりを降りた理由を的確に理解していた。

お兄ちゃんは……………目の前にいる三人家族に同情したワケじゃない。

自分さえ助かればいいという自分勝手な人間が喚き散らす醜い罵声に耐えられなくなったのだ。

隣に座っていた青年が、兄を想い泣き続ける綾乃の肩に手を置こうする。

その表情は一見すると綾乃を憐れんでいるようにみえるが 内心

では、綾乃の心の傷に付け込み、彼女を自分の物にしようという下劣な下心を隠していた。

しかし　自分に手を伸ばそうとしている青年が、さきほど三人家族に罵声を浴びせた人物の一人であると知っていた綾乃は、

「私に触るなッッ!!」

あらん限りの憎悪を込めて、青年を睨みつける。

「ひっ!?!」

一瞬で気圧された青年は、情けない悲鳴と共に伸ばしていた腕を引っ込めた。

「人間なんて……汚いッ!?!」

心の底から搾り出された綾乃の言葉に反論できる者は、誰一人としていなかった。

宛先：・・・ 件名：・・・

P M 23:38

夜空に消えていく輸送ヘリを、晋はその姿が消えるまでずっと見送った。

さきほどの騒ぎの一部始終をみていた自衛隊の面々と警察官達は、敬意を込めて晋の肩を叩いていく。

南に築かれたバリケードでは押し寄せてきた感染者との戦闘が勃発しているのです、そうのんびりと感慨に耽っている暇はないのだが。

『じつちにミニミ持ってこい！』

『キャリアー寄越せッ！このままじゃ押し切られるぞ！！』

『固まってるところにグレネードをぶっ放せッ！！』

飛び交う怒号に、飛び散る葉莢。

絶え間なく響く銃声と爆音。

できればこのままバイクで逃げたいところだが、主要な出入り口には既に感染者が押し寄せてきており、脱出はほぼ不可能らしい。

生き残るためには、この市役所に築かれた陣地を死守する他に方法はないのだ。

晋は溜め息を吐きながらも、自らのやるべきことを一つ一つ確認していく。

- 一つ　　なんとかこの場を凌ぐこと。
- 一つ　　なんとかこの場を脱出すること。
- 一つ　　なんとか生きて綾乃にもう一度会うこと。

確認終わり！

「さて、ひとつ気合い入れて臨みますか！」

アタッシュケースからG36Cを取り出すと、少し戦況が苦しめと思われる箇所に走っていった。

立て続けにショットガンを撃っているアサルトでスペシャルな警官の隣に立ち、晋はアサルトライフルを構える。

ロックを外して弾丸を装填。

とりあえず、ライフルの反動を知るためにセミオートに設定。

サイトを覗き、感染者の頭部に狙いをつけて　トリガーを引いた。

バシユツ！

ターゲットの頭から上半分が吹き飛んだ。

頭を失った感染者はそのままよろよろと数歩歩き、崩れ落ちる。

それを見ていた警官達が、晋の腕に感嘆の声をあげた。

「やるじゃないか。銃を撃った経験でもあるのかい？」

「拳銃なら一度だけありますが、ライフルは初めてです」

「ほう。こつちも負けてられないな」

警官達も負けじとショットガンを連射して、感染者を撃ち抜いていた。

晋は、数発セミオートで感染者の頭部を撃ちぬいたあと、設定をフルオートにチャンジして、トリガーを引いた。

次々と撃ち出されていく弾丸が、的確に感染者を仕留めていく。

カチン

マガジン内の弾薬が全て尽きたアサルトライフルが沈黙した。

晋は空になったマガジンを捨て、素早く新しいマガジンをセットする。

その一連の動作を目撃した自衛官とスペシャルでアサルトな警官は、口を揃えて言った。

「君、才能あるよ」

晋はその言葉に苦笑いで返し、銃口を感染者達に向けた。

自衛隊と警察に混じって戦う、たった一人の民間人。

滑稽だが、なぜか違和感がないその光景は、晋の銃を扱うセンスによるものなのか。それとも、妹と生きて再び会うという執念のためか……。

それからしばらく戦闘が続いて。

「G36専用のマガジンはどこだ!？」

晋は押収されたという武器を補完してある輸送車の中にいた。

弾薬を求め、辺りを物色する。

さっさと他のライフル担いで出て行けばいいものを、晋はG36に

愛着を持ってしまったため、半ば意地になって探していた。

「む、とりあえずSPAS12貰っていくかな」

スリングを肩に回し、ショットガンを背負った。

「ハッ!? そうじゃなくてマガジンマガジン!!」

ガサゴソガサゴソ……

「お、あつたあつた!」

マガジンポーチに新しいマガジンを詰め込み、余った弾薬を見つけやすい場所に置いておく。

そこで、ふと視界の端にドラムマガジンを発見した。

「なんだこれ? G36用のドラムマガジンか?」

中身には弾丸がたっぷり詰まっているらしく、ズッシリと重い。

早速装填してみる。

「おおっ! ビンゴだ!」

それにしても、これだけの物を一体どこから押収したのか……。

「気にしても仕方ないか」

思考を放棄した晋は、弾薬とショットガンを携えて輸送車を飛び出す。

そこで

ドン！

「うわっ！？」

「おっと！」

晋は影から飛び出してきた少年とぶつかってしまった。

高校生の制服と思われる者を着ている少年は、コロンと道端に転がる。

「あ、ゴメン。大丈夫か？」

「はい……なんとか……」

「ん？その声ひょっとして……スピーカーでここに集まるよう叫んでた子かな？」

転んだままの少年に手を差し出し、そのまま起こした。

「あ、聞いてくれてたんですか？」

「うん。そのおかげで助かったんだ。もうここにはいないけど、妹共々礼を言わせてもらうよ。ありがとう」

「どういたしまして。その……妹さんはどうなされたんです？」

「輸送へりに乗せて逃がしたよ。……思いっきり泣かれたケドね」

少年は話を聞きながらも、輸送車の中から銃器を物色し始めた。

「そうなんですか……。でも、よかったですね」

「？」

「妹さんの安全が保障されてよかったじゃないですか」

「……そうだな。てか、さっきまで君の姿みなかったけど、今までどこに？」

「ちよっとやることがありました。街を原チャリで周ってました」

ここで晋が冷たくした瞳を細めた。

「ふーん……よく無事だったね」

「自分でも運がいいと思います」

「ま、お互い生きて街から出られるように頑張ろうぜ。……もう家には帰れそうもないけど」

そう言っつて背中を向けて走り去った晋の後ろ姿を、少年はじつと見つめ続けた。

宛先：××× 件名：物語のお終い

エピソード

ここは都心の一等地に建てられたとある高級マンションの一角。そこには、先のバイオハザードで家屋や財産を失った人々が住んでいる。国から無償で提供されている仮の住まいだ。

あの悲劇から一週間が過ぎた。

GWは終わり、人々は時間に追われるように普段の営みを再開していた。

ニュースではGW中に起きた悲劇を【ゴールデンウィークがみせた悪夢】という題名のもと、連日連夜報道され続けている。

事件に関わった者は、自衛官だろうが警察官だろうが すべてを失った被害者の一般市民であろうが、分け隔てなくマスコミの餌食にされていた。

マンションのとある一室。

「……」

黒皮のソファアームに座り、付けっぱなしのテレビを無気力に眺める一人の女性がいた。

艶やかで癖のない美しい黒髪、非の打ち所のない黄金率で整えられた顔立ち、バツグンのプロポーションを誇っているもの。その瞳は曇り、何かを映しているようで、実は何も映していない。

死んだ魚のような目つきのせいで、せつかくの容姿が台無しになっ

ていた。

生気のない絶世の美女の正体は、あのバイオハザードを無事に生き残った綾乃だ。

ブーツ……ブーツ……

ガラステーブルに置かれていた携帯電話が、バイブレーションのおかげで耳障りな音を奏でる。

ここ数日間は友人達からの電話やメール、さらにはどこから番号を入手したのか、テレビ関係者からの電話が引つ切り無しにかかってきていた。

綾乃は携帯の表示に目を向けた。

相手は、大学のサークルで半ば無理矢理に電話番号を交換させられた男性の先輩からだった。

綾乃がこのマンションに居ついでからというもの、ニュースで騒ぎを知ったらしく一時間に一回は電話をかけてくる。

鬱陶しい……。

あまりのしつこさにいい加減疲れてきた綾乃は、仕方なく電話にでた。

「もしも」

『綾乃かい！？どうして今まで電話に出てくれなかったんだ！心配してたんだよ』

こつちの話も聞かずにゴチャゴチャとマシンガントークを繰り返す電話の相手。

馴れ馴れしい奴……。

呼び捨てにされたことで、不機嫌さが募った。

大して親しくもないのにいつの間にか呼び捨てにされていたことについて、綾乃はこれまで何とも思ったことがなかったのだが。

いい加減、ウザい。

『大丈夫、僕が傍にいるよ。君が失ってしまったものは、僕が取り戻してあげるから。』

失ってしまったもの　そう聞いた瞬間に、綾乃の無表情が怒りとも悲しみとも取れない感情に塗りつぶされていく。

「なら……取り返してきてください……」

『えっ？』

それを意識した瞬間には、もう、止められなくなっていた。

「私の……生き別れた兄を……取り返してください……」

『そ……それは……』

途端に、電話先の相手の声が小さくなっていく。

……。
ほらね。テキトーなことばかり言って、私の気を引こうとして

クダラナイ。

「出来もしないことは言わないほうがいいですよ。あと、呼び捨てはやめてもらえますか？不快です。では、もう電話してこないでくださいね。ウザいので。それでは」
『待つ』

プツッと、綾乃は携帯の電源を切る。

「もう……どうでもいい……」

綾乃はポツリと零した涙を隠すように、膝を抱えて蹲った。

世界史上最低最悪の災害がもたらした人的被害と経済的被害は計り知れないものがあつた。

今、政府は国内外の波紋を沈静化するために躍起なつて働いている。まあ、あんな悪夢のような出来事が現実で起こってしまったえばそれも当然だろう。

被害者に手当てが施されるのは、当分先の話になるかもしれない。とはいっても、それを納得させるために、被害者には無償で色々と利便性の高い一等地の高級マンションに住まわせているのだ。それに、ある程度の保証金は出ているし、文句を言う人間は誰もいない。

たとえ、一生癒えない傷がその心に残されているとしても。

ピンポーン！ピンポーン！

唐突にインターホンが二回鳴った。

「ッ！？」

突然の来訪者に、思わず綾乃は脅える。

このマンションには、不審人物やマスコミ記者の侵入を防ぐため、オートロックの自動ドアが一階ロビー前に設けられている。マンション内に入るには、まず自動ドア前に設置されたインターホンに用がある部屋の番号を入力し、住民に用件を伝えた後でオートロックを解除してもらわなくてはならない。

その際にインターホンは、一回だけしかならないのだが。

一二回鳴った!?

インターホンが二回鳴った場合、それは既に玄関前までその人物が来ていることを表す。

宅配業者やその他の者であれば、まずはオートロックを解除してもらう必要があるため、その線は消える。

相手が家族であれば、わざわざインターホンを鳴らす必要はない。つまり、この来訪者は、そのことを知る術を持たない者かもしれないということだ。

よくよく考えれば一階ロビーのオートロックを潜り抜ける術などいくらでもあるのだが、綾乃はそんなことなど考えもしなかった。

飛びつくようにインターホンの受話器を取る。

「はい!どちら様ですか!??」

「……………」

本来なら、モニターに相手の姿が映るはずなのだが……故障してしまったのか、画面は黒く染まったままだった。

「あの……モニターが故障してしまったみたいで、姿が映らないんです。どなたでしょうか？」

「自衛隊から派遣された者です。蓮杖 晋様の……死亡通知をお届けに参りました」

「え……？」

何を言われたのか、理解することができなかった。

「お気の毒ですが……貴方様のご家族であらせられるお方のお亡くなりをご知らせるお手紙を預かっております」

「……嘘……そんなの……嘘です！」

「……お悔やみ申し上げます」

ガタンッ！

受話器を落とした綾乃は、呆然とその場に立ち尽くした。

目の前の風景が真っ黒に染まっていく。

それと取って代わるように、綾乃の脳裏に一週間前の光景がフラッシュバックした。

命を賭けた逃亡劇。

広く逞しい背中。

静かな鼓動に、温かい胸。

強気な笑みに、安らかな寝顔……。

そして

輸送ヘリのハッチに遮られる間にみせた、柔らかな微笑。

『私が助かったのは　あの日、彼が私に輸送ヘリのスペースを譲

つてくれたおかげです』

『その青年は、今現在も無事なのですか？』

『それはわかりません……でも、私は彼の無事を信じています』

ふと、テレビが気になることを言っていた。

どうやら、あのバイオオハザードの生き残りである男性が、自分の身に起こった出来事を語っているらしい。

どこかで見たことあるような……。

しかし、空虚な心が思考を阻害する。

綾乃はしばらく呆然と立ち尽くした。

どのくらい待たせてしまっただろう。

自衛隊の人、困ってるだろうな。

早く玄関に行って、手紙貰ってあげなくちゃ。

そしたら、お兄ちゃんを迎えにいこう。

きつと、あの場所で待っているに違いない。

あの日……私とお兄ちゃんを切り離れたあの場所で待っているに違いない。

私のことをずっと待っているに違いない。

ズットマツテイルニチガイナイ。

綾乃の心は壊れかけていた。

だが、当の本人はそんなことなど露知らず、とてとてとスリッパを

鳴らして玄関に向かう。

そして、扉を開けた。

「お待たせしてしまっごめんなさい」

果たして扉の先に待っていたのは 質素な格好をした自衛隊の隊員だった。

「こちらが通知になります」

「はい。わざわざありがとうございます」

明らかに綾乃が正常ではないことを悟った自衛官は、気まずげに視線を逸らした。

「あの……どうかお気を確かに……」

「はい？ どうしてですか？」

「いえ……失礼しました。それでは」

自衛官が踵を返す。

綾乃が扉を閉めようとする。

綾乃の心が、修復不可能なまでに破壊される運命のカウントダウンが始まった。

3

エレベーターが到着する。

2

エレベーターの扉が開く。

1

見覚えのある黒いジャケットを着た青年が飛び出してくる。

0

ボタン

終焉を告げる扉が、完全に閉じられる。

この瞬間、現実を受け入れることが出来なくなっていた綾乃は、自らの心を完全に破壊した。

残酷な現実から永遠に逃げ続けるために。

巻き戻し。

見覚えのある黒いジャケットを着た青年が飛び出してくる。

「くそっ！間に合わなかったか！！」 0

扉が完全に閉まる寸前で、綾乃の手が止まった。

聞き覚えのある声がしたからだ。

通知を届けた男性は一瞬だけ怪訝な表情を見せたが、事情を把握したのかそのままエレベーターに乗って姿を消した。

だが、そんな光景など綾乃の目には一切映っていない。

「お兄……ちゃん？」

……ずっと待ち焦がれていた青年の声。

……心が壊れてしまいそうになるくらい、想いを寄せた相手の声。

それが今、目の前にいる。

「ゴメンな、綾乃。死亡通知なんて受け取らせちゃって……ビックリしただろ？」

「……………」
「ちょっとした手違いがあつてさ。いつの間にか死んだことにされてたんだよ。いやあ、ビックリだね」

「……………」
「とはいっても、本当に危なかつただけだな。危うく　って、どうした？」

何時までもポカンとしたままの妹の姿に、晋は怪訝な顔をみせる。顔の前で手を振ってみたり、頬をみよーんと引っ張ってみても反応がない。

「おーい……………綾乃？」
「……………」

ガバッ！

綾乃は無言で晋に抱きついた。
その表情は影になっていて、よくみえない。

「お……………おい、どうしたんだよ？」

てつきり泣いて出迎えてくれるものだとばかり思っていた晋は、予想とは大分違う妹の反応に戸惑いを隠せなかつた。

しかし、そんなことなどお構いなしに無言で抱きついていた綾乃は蚊の鳴くような声で何かを呟く。

「……………と思った」

「え？」

「死んじゃったのかと思った……………だから……………迎えにいかなきゃって……………」

「迎えにつて……お前……まさか……」

ここで初めて、綾乃がどれほど危険な状態にあったのか晋は理解した。

もし、あとコンマ数秒でも遅かったりしたら、一生取り返しのつかない事態に発展していただろう。

まさか、あの扉が閉まっていたら……アウトだったかもしれないのか……？

命よりも大切な妹が壊れかけていたと知って、晋は背筋が凍りつかせる。

「この……バカたれが……ッ」

晋はありったけの想いを込めて綾乃を抱きしめた。

「俺は……ここにいるよ……」

綾乃の瞳が見開かれる。

「お兄ちゃん……」

「前に、お前が俺に言った台詞だ。まさか、忘れたワケじゃないよな？」

「あ……う……う……」

晋は妹の額に自分の額をくっつけて、そっと呟いた。

綾乃はようやく現実を受け入れることができたのか、とんとんその瞳に涙を溜めていく。

「お……おか……おかえりなさい……ッ」
「ん、ただいま」

言うべきことはそれだけ。

しかし、ずっと言いたかった一言。

その一言を力の限りを振り絞って声に出した綾乃は、今度こそ愛しい兄の胸で、心ゆくまで泣いた。

地獄を生き残った二人の兄妹に、ようやく平穩の二文字が送り届けられた瞬間だった。

晋と綾乃がいるマンションから少し離れた超高層ビルの屋上で。

どこかで見たことがある少年が、双眼鏡を左手に何やら携帯電話で誰かと連絡を取っている。

『目標は妹と接触しました』

『奴は使えそうなのか？』

『僕の見立てでは、恐らくダイヤの原石かと』

『ふむ……よかろう。引き続き監視を続行しろ。結果が決まり次第、追って連絡する』

『了解』

パタンと携帯電話を閉じた少年は、そつと不気味な笑みを浮かべた。

END

宛先：××× 件名：物語のお終い（後書き）

これを持ちまして、THE RED MOONの連載を終了させていただきます。

こんな駄文を最後まで読んでくださった読者の皆様に、最上の感謝を申し上げます。

ちなみに、既に次回作のプロローグが公開されていますね。最新作はトタバタラブコメディとシリアスな物語を混同させたSFアクション（ラブ）ストーリーです。

主人公達の何気ない日常生活を淡々と描く《表パート＝一人称》影で熾烈な殺し合いを繰り返している”能力者”達の闘いを描いた《裏パート＝三人称》のような構成で御贈りする予定です。

引き続きお付き合いくださいなれば感謝感激でございます。

では、またお会いする日まで。

番外編その1

P M 19:18

”彼ら”が店内を去ってから、早1時間と少しが経過していた。

私こと柏木魅琴かしわぎ みことは、いざとなれば自分も店内から脱出できるように私服に着替えているところだ。サーブスシーンはないので悪しからず。

「どうしてこんなことになったのかしら……」

本日何度目ともしれない溜息を零しつつ、私は上着を羽織り、お店用のハイヒールからスニーカーに履き換える。

事の発端は、恐らく4日前から立て続けに起こっていた猟奇殺人事件に違いない。

とある民家の母親が、4歳と6歳になる子供を殺害。たまたま庭で草筆りをしていた隣人が、尋常ならざる子供の悲鳴を聞きつけて110番通報した。

駆け付けた警察官数人が問題の家屋に踏み込んでみると……そこには上半身を鮮血に染め、自らの子供の腸を貪り喰らっている母親の姿が。

その異常と口にするのも憚られるような残虐極まりない行為と、母親の理性を感じられない瞳に恐怖した警察官達は、迷うことなく拳銃を抜き放ち、三回の警告の後に発砲。

計4発の銃弾を母親に撃ち込み、射殺した　　というもの。

警察官が銃を発砲しただけで大騒ぎするこの日本で、警官が民間人を射殺するという事態に日本中が震撼した。

そもそも母親が子供を食い殺すという事件の異常性も相俟って、ニュースでは連日連夜この話題が取り上げられていたほどだ。

その後も立て続けに似たような事件が頻繁に起こり、わざわざ地域内をパトカーが巡回して注意を呼び掛けるまでに至っている。

ただことじゃないというのは薄々感じていたけど……まさかこんなことになるなんて。

「お願い……悪い夢なら早く覚めて……」

こんな悪夢なんて早く終わってほしい。

顔を覆いながらそんなことを呟いてみるけど、店内のそこかしこから聞こえてくる女の子達の嗚咽が、無情に現実を突きつけてくる。

現実逃避してたって無駄なのは分かってる……でも、無力な一女性である私には他にできることがない。

携帯電話は何故か通じず、店の外には大勢の動く屍達が蠢いているこの現状。

下手に逃げれば食い殺されるのがオチだろうし……。

今夜のバイトが終わったらそのまま実家に帰るつもりだったから、今回は偶然にも車で店に来てたけど……店の外に出て、人を情け容赦なく喰らう化け物の群れを突っ切って車まで走り抜こうと思えるだけの勇気もなく。

何より、一人が恐かった。

あーあ……あのとき、私の車で一緒に逃げようって、何で言えなかったんだろう……。

綾乃は無事に逃げきれたのかな……。

私は役に立たない携帯電話をハンドバックに放り込むと、車のキーだけはいつでも取り出せるように、上着のポケットへ押し込んだ。

ロッカールームを後にして店内のホールに戻る。

窓の遮光ウィンドウは全て閉じられ、入口付近には椅子やら中身が入ったダンボールを積み重ねて嚴重にバリケードが築かれている。

その惨状は、昨日まで客で賑わっていた焼き肉店とはとても思えない。

そんな店内の光景を見て、私は再び押し寄せてきた恐怖を胸の内に押し留めるように、近くの椅子を引き寄せて体育座りで座り込んだ。

店長は先ほど襲われた恐怖からか、安心して何やらブツブツと独り言を繰り返し、男性従業員達はモップやら箒を片手に、震えながら閉ざされた入口と窓の外を睨みつけ、女性従業員達は一箇所に固まって、ただ脅えて泣くばかり。

キリストだろうがヒンドウーだろうが何でもいい。何でもいいからこんな時こそ神様の出番じゃないのか。まあ、今更絶える気なんてさらさらないけど。

もし生きて逃げ延びることができたら、神様を信望する連中の言い訳の一言でも聞いてみたい気がする。

……我ながら、実にくだらないことを考えていたときだった

「も……もう我慢の限界だっ!!」

突然の叫び声に、店長を除いた店内の全員が身を強張らせる。

声の主は渡部わたへだった。

我慢が限界なのはわかったけど、これからいつたい何をやらかす気なのか。

「どうせここにいたってみんな喰われてお終いだ！！だったら、そうなる前に俺は逃げるッ！」

そう喚き散らして、入り口のバリケードを崩そうとする渡部を周りにいた男連中が慌てて取り押さえた。

「離せ！！離せよ！？俺はこんなところで死にたくないッ！！」

「テメエがバリケードを破ったせいで、”あいつら”が押し寄せてきたらどうするんだよ！？」

「知るかつ！！自分らで何とかしろよ！！……くそっ！寄って集って邪魔しやがって、屑共が！！」

暴れる渡部を囲むように、5人の従業員が必死になってバリケードを守る。

そりゃ必死にもなるわよね。あいつがバリケード崩したせいで屍達が店内に押し寄せてきたら、裏口から逃げるしかなくなるんだから。そうなれば車を持っている私はともかく、自転車や徒歩で店まできた連中が無事に生き延びられる保障なんてどこにもない。

「くそっ！くそっ！！」

バリケード突破は不可能と判断した渡部は、店中を見回して脱出口を探しているようだった。

人間はパニックると目の前の光景しか見えなくなるといっけれど、どうやら本当らしい。

「つか、ここから逃げろって言われたときに、まっ先に立て籠もろうって提案したのアンタじゃん。」

「そんなに逃げたいたら、裏口から逃げれば？」

「う、裏口？……そうかつ！」

私がそう助言すると、渡部はハツとしたように呟いた。

それから、知的な瞳からは程遠い目付きで私の身体を賞めるように見つめてくる。その口元は下卑た笑みを薄らと浮かべていた。

……嫌な予感がする。

「なあ、柏木。俺と一緒に逃げないか？」

ほらね……。

誰かと一緒に逃げるのは賛成だけど、アンタor店長と一緒にいるのだけはご免よ。

「悪いけど、他を当たって。私はここに残るから」

「そうツレないこと言うなって。今ならまだここから抜け出せる。

俺が守ってやるからさ！」

「生憎だけど、私はまだ店内から逃げるつもりはないの。それに、綾乃のお兄さんならともかく、ヘタレなアンタが私を守り抜けるとは思えないし」

「くっ……！」

「私みたいな足手纏いは放って、さっさと自分だけで逃げなさいな」

渡部は顔を茹で蛸のように真っ赤にして黙った。

どうやら、奴のチンケなプライドを傷つけてしまったようだ。

「……………どうせみんな死ぬんだ。それなら」

途端に赤くなつた顔色を元に戻し、何やら冷静になつたと思いきや、渡部は踵を返して何故かキッチンに向かつていった。

脱出の際の保険として、包丁の一つや二つでも確保するつもりなのかしら。

すると、渡部がキッチンから戻ってきた。予想通り、右手に包丁を携えて。

しかし

「ここに残るお前らはみんな死ぬんだ。それなら”あいつら”がアソビを楽しむ前に、まず俺が楽しんでやるよ。脱出はその後だ」

涎を垂らしながら私に詰め寄ってくる渡部の姿に、周囲が息を呑んだ。

右手に持った包丁を見せ付けるようにして私に向けてくる……あのね、包丁は人に向ける物じゃないのよ？ゲス。

「ホントは綾乃で楽しみたかつたんだが、この際だしな。我慢してや」

クソ野郎が言い終わる前に、私は椅子の影に隠していた消火器の栓を抜いた。

そして、遠慮なくホースの先を身の程知らずのバカに向ける。

ブシューーーーーッ！！

勢いよく噴き出される白い煙に、渡部が怯んだ。

「うつつ！？ゲホゲホッ！！こ、この……」

苦しそうに咽る渡部を冷やかな眼差しで見つめつつ、私はホースの先を握って、フルスイングで消化器を振り回した。

ゴインッ！！

鈍い音と感触が手に伝わり、渡部が崩れ落ちるようにして倒れた。それから、一部分が凹んだ消火器を放り捨てて、白目を剥いた渡部の股間を思い切り蹴り付ける。

『うつつ！？』

男性従業員達から短い悲鳴のようなモノが聞こえたが、気にしないことにしよう。

「アンタみたいなイ○ポ野郎に犯されるくらいなら、化け物の前で自慰ってる方が10倍マシだっつーの！」

口から泡を吹いて昏倒している渡部に向けて、右手の中指を上突き立て ようとしたときだった。

ガシャーンッ！！

屍達の圧力に屈した窓ガラスが盛大に割れた。そして、遮光ウィンドウを引き裂くように……。

『ヴあああ………』

大量の……動く屍達……が……。

「わあああッ!!!?!」

誰かの悲鳴で我に返った私は、一目散に裏口を目指して駆けた。

「ギヤアアアッ!!」

「イヤアアアッ!!?!」

後ろから聞こえる絶叫が、私から冷静さを奪っていく。

震える手で裏口の扉を開けて、蹴破るようにして駐車場に出た。

「ヒッ!?!」

目の前に 全身血だらけの 男の人が

『アアアア……ッ』

「ッ!?!」

肩に噛み付かれたところで、私は全身の力を使って男の人を押し飛ばした。

そのままよろよろと体勢を崩している隙に、一気に自分の車目掛けて走る。

辺りをウロウロと彷徨っている亡者達の脇を駆け抜けながら、ポケットからキーを取り出して、車に向けてボタンを押した。

ガシャッと運転席のドアの鍵が開いたことを知らせてくれる。この時ほどリモコン式のキーで良かったと思っただことはない。

「ハアッハアッ……」

車内に飛び込んだ私は、乱れた息を整えることもせず、キーを刺してエンジンを掛けようとするが、手がこれ以上ないくらい震えるせいで上手く刺さってくれない。

「なんでよッ!?!」

いつもならもう車を出していてもおかしくないのに、未だにキーすら刺せていないことに苛立ち、焦りを覚える。

噛まれた肩が異常に熱い。どうやら熱を持ち始めたようだ。早いうちに消毒しないと……。

『ヴああああ……』

「うわああああッ!?!?!」

唐突に悲鳴が聞こえ、その先に視線を向けてみると、裏口から飛び出してきた渡部が屍達に集られていた。

そして、身体を次々と噛み千切られていく中で、車の中にいる私と目が合う。

私に向けて伸ばされる手。

轟く絶叫。

さらに集まってくる屍達。

そして

悲鳴が聞こえなくなり、屍達の間から辛うじて伸ばされていた手が……地面に落ちた。

「うっうっううあああああ○× @ 〒 § ± ッッ!?!?!」

最早、自分が何を叫んでいるかも自覚できない。

キー差し込み口の金属部分を出鱈目に傷付けながらも、必死になつてキーを差し込もうと粘る。

「やった!！」

やっとのことでキーが刺さり、私はエンジンキーを右に捻った。快調な駆動音を鳴らし、ホラー映画のようなエンストを起こすこともなく車のエンジンが始動する。

「は、早く逃げないと……!」

エンジンの音に気付いた屍達が、弱々しい足取りでこちらに近づいてくる。

慌ててアクセルを踏み、車を発進させた。

進路上を塞ぐようにして立っている”奴ら”を躊躇いなく轢き殺しながら、私は何とか焼き肉店の敷地から逃げ出すことができた。

「ふうー……ふうー……」

熱を持つ肩の影響を受けたかのように、私の口からも熱い吐息が漏れる。

この描写がエロい状況に繋がるのなら私も大歓迎だけど……って、現実逃避してる場合じゃない。

みんなはどうなってしまったのだろう……考えるまでもないかな。結構長い時間駐車場にいたけど、結局裏口から出てきたのは渡部だけだったし。

それにしても、何だか凄く傷口が痒い。文字通り”腐った”連中に噛み付かれたからなあ……きっと細菌が入り込んだのね。

手当てできそうな場所を探さないと……。

『こちらは 市役所です！現在、自衛隊と警察が市役所周辺にバリケードを築いています！生存者の皆さんは、何とか市役所まで逃げてきてください！お願いします！何とか、何とか、ここまで生きて辿り着いてください！！』

「 放送！？生存者がいるのっ！？」

胸の内に抑えきれない歓喜が沸き起こった。

市役所への道は勿論把握している。私自身も車に乗ってるし、これならほぼ確実に生きて辿り着ける。

もしかしたら、綾乃とお兄さんにも会えるかもしれない。

そしたら、思いつきり抱きしめてから、二人をからかって遊んでやるんだ。

先ほどまで心を支配していた絶望と恐怖はどこかへ吹き飛んでいた
吹き飛んでいたのに。

「 ツ！？」

まるで発作を起こしたかのように、突然全身が痒くなった。
車を運転するどころの話ではない。

着用していた服を破り捨てるようにしながら、両手で全身を掻きま
る。

「 痒い痒い痒い痒いかゆいかゆいかゆいかゆいかゆいかゆいかゆい
カユイカユイ……」

思わずリキんでしまう あしがアクセルペダル をつよくふみ つ
ける。

とめら れナイ。トマ ラナイ。

カユみ もと めラ れない。と まりソ もナい。
あれ？これ……オ にく？ヤダゆ びまっ か。
チと まうな い。
ダレ、タスけテ。こ わ、 こワイ。

オ と、ば くは ツ、
し た。

番外編その2 - 1

モニターの前の皆さん、初めまして……いや、お久しぶりというべきでしょうか。僕の名前は金城飛鳥かねしろあすかと言います。

現在、ピチピチの高校2年生です。両親はいません。とある高級マンションに二人暮らしです……というのは表の話で、僕の本当の正体は国に雇われたエージェント……というところでしょうか。

その僕が今何をしているのかというと……あーくそ！自分の家の中だからって義妹とイチャつきやがって……とと、失礼しました。

改めて、今何をしているのかというと、とある事件を自力で生き残った青年の監視をしています。この青年が僕の見立てではなかなか見所のある人でして。

とまあ、この話は置いて。さて、今回の番外編その2では、僕が”あの時”、どの場所で、何をしていたのかを赤裸々に告白するというものです。

あまり面白い話ではないと思いますが、よろしければどうぞお付き合ってください。

では。。。

僕はそれまでとある市立高校の2年生でした。

転校したばかりでしたが、地方の学校には珍しく虐めもなければ不良もない、とても平和で穏やかな学校の一生徒です。

任務の都合で仕方なく居座っただけでしたが、僕個人としては、今思えばとても気に入っていた学校です。友達と呼んでも差支えない人間も数人いましたし、何より初めて”任務上”での私生活を満喫できた場所でした。

しかし、僕の任務上での私生活はこの学校に転校してから4か月で終わりを見るハメになりました。

そもそも、何故僕がこの学校に転校してきたのかといいますと、そ

れはとある製薬会社の監視をするためです。

僕が通う高校の西方1km先に、とある製薬会社の支社があります。その支社の社員から、とある密書が送られてきたのが全ての始まりです。

曰く　自分が勤める会社で、生物兵器の開発を手伝わされている。助けて欲しい　というような内容でした。

組織内でも、全世界各地に存在するこの会社の支社が非合法の兵器開発に着手しているという情報は入手していましたし、いい機会だということ僕が派遣されたという次第です。

そして、少しずつ製薬会社の取引先を洗いながら、その密書を送ってきた人物と内密に情報をやり取りし、決定的な証拠を得られるまであと少し……というところで

問題の生物兵器に関連するウイルスの漏洩事故が起こってしまったのです。

支社の責任者は自殺。社員も何とかウイルスの漏洩を防ごうと奮戦したようですが、結局は自身もウイルスに犯されて怪物化。

そして、ウイルスは社内だけに留まらず、工業排水や廃棄物に混じって拡散。未曾有のバイオハザードへ発展しました。

何とか例の密告者だけは保護し、いざというときの仮対策本部候補だった市役所内への誘導に成功、そこでウイルス特効薬の開発に尽力してもらっていました。

その特効薬の決め手となったのは、ウイルスに対する抗体を持つ人物の血液。それは僕の血を提供することで解決をみたのですが……。そこで本部からの命令が届いたので。

【優秀な”国家公務員”候補を選定するために、このバイオハザードを利用せよ】と。

これが何を意味するのか要約すれば、市民への特効薬投与の自粛、市民の逃亡幫助の自粛。

つまり、バイオハザードの中を自力で生き残り、かつウイルスに対する抗体を持つ人物を見つけ出せ、と本部は命令してきたということとです。

僕個人の意見を述べれば、それは非人道的極まりない方法だと思います。

しかし、一エージェントの僕が本部の命令を無視できるワケもなく……。

結局、こちらが人道的な対処を実施しても到底間に合わないような速度でウィルスは市内へ浸透していきました……まあ、言い訳ですが。

地元警察組織が動き始めた頃には既に事態の収拾は深刻を極め、予めこの事態を予測していた本部では自衛隊による対生物災害専用のチームが編成された次第で。

改めて僕に下された任務といえば、製薬会社に残されたデータの回収でした。

P M 18:11

「……ほとんどのデータは消去済みですか」

デスクトップのパソコンからフラッシュメモ리를抜き取り、懐に仕舞いました。

僕の横には右手に所持した拳銃で自分のこめかみを撃ち抜いたらしい責任者が、椅子に座ったまま事切れています。

死体の傍で黙々と作業するというのもあまり気分がいいものではありません。

「さて……そろそろお暇しましょうか 　ん？」

やるべきことも済んだので、さっさとこの陰気臭い場から立ち去る

うと思ったのですが、ふとパソコンのデスクトップに気になるアイコンが。

My secret collection

なんですかねえ、コレ？

気になったので、とりあえずダブルクリックしてみました。

すると、どうでしょう！部屋の隅にあった本棚が横にズレて、隠し部屋が現れたではありませんか！

……とりあえず、行ってみましょうか。

懐のホルスターからG18Cをそつと抜き、警戒しながら隠し部屋に近づきます。

まあ、特に気配などは感じませんが念のためです。

この支社にお邪魔してからというもの、感染者に成り果てた社員の他に、何やら実験中だったらしい生体兵器が我が物顔で闊歩していて、始末するのに骨が折れました。

畏らしいものも発見できず、警戒の必要はなしと判断した僕は遠慮なく隠し部屋に入ってみました。
するとそこにあったのは

「世界一ガンコントロールが厳格な日本にいなから、よくまあこれだけの物を……」

リボルバーからオートマチックハンドガン、ボルトアクション&セミオートライフルにアサルトライフル、サブマシンガンとまさしく選り取り見取りの銃器達。

その中でも特に目を引いたのは、

「うーん……オリジナルデザイン……かな？」

デザイン自体はシンプルだけど、バレルが無骨で厳つい10インチの大型リボルバー。装填されてる弾丸は・454カスール。

ふむ……いい銃です。手持ちのグロックじゃ色々キツかったところですし、せつかくなので頂いていくことにしましょう。

ホルスターはつと……ありましたありました。

「さすがにこれだけの銃器をここに放置していくのは勿体ないですね……」

腰の右後ろ辺りにホルスターを括り付けた僕は、ブレザーの内ポケットから携帯電話を取り出しました。

今はもう付近の電波塔はシャットアウトされていて、普通の携帯では通信できませんが、僕の携帯電話は特別仕様なので問題ありません。

「あ、もしもし？金城です。はい、菅原一佐をお願いします」

自衛隊の菅原陸等一佐にここにある銃器を回収した後、各々で利用するように連絡しました。これでよし。

「さてと……どうしましょうかね？」

本部から下された任務は終了。あとは自衛隊のお手伝いをしてポイントを稼ぐなり、自力で脱出するなり自由なのですが……。

そうですね、仮にも4か月もの間、この”僕”に一高校生としての青春を謳歌させてくれた街です。

望みは薄いですが……もしかしたら友達も生き残っているかも知れ

ませんし、ここは一つ個人的に恩返しでもしましょうか。

「まずは市役所に戻って、放送の一つでも流しますかね」

その後は、個人的に付き合いのあった友達の家でも廻っていくことにしましょう。

P M 19:41

うーん……淡々と喋るつもりだったのですが、予想以上に感情的になってしまいました。僕もまだまだ未熟ですね。まあ、この放送で少しでも多くの人が市役所に辿り着いてくれればいいのですが。感染者はご遠慮願いたいですけど。

さて、放送も終わった、弾薬の補充も終わった、グロック（通常マガジン2つ）よし、大型リボルバー（カートリッジ3つ）よし、ベネリM3ショーティ（予備弾装6発）よし、ウィルス特效薬よし。

「さ、いきますか！」

「どこに行くんだ？」

いきなり出鼻を挫くようにして僕の前に現れたのは、菅原一佐でした。

「さつきは我々を手伝うと聞いたが……言葉を違えるつもりか」

「そんなつもりはありませんよ。ちょっと野暮用を片づけてきます」

「野暮用とは？こんな廃墟になってしまった街で、今更そんなものがあるとは思えないが」

「もしかしたら生き残ってる友達がいるかもしれないので、適当に

探してくるだけです」

「……それは本部からの命令を無視することになるのでは？」

「だったら、力づくで僕を止めますか？」

菅原一佐が腰のホルスターに手を伸ばしたので、僕は懐に隠してあるナイフに手を伸ばします。

その気になれば、菅原一佐が既に拳銃を構えていたとしても、彼より先にナイフで斬り付けるくらいはできますので。

「……まあ、いいだろう」

しかし、菅原一佐は結局ホルスターに仕舞ってある拳銃には手を触れず、胸ポケットに忍ばせていた煙草を取り出すだけでした。

「……市役所に放置されてる原チャリ、一台借りますね」

少々拍子抜けしながらも、そう言って背中を向けた僕に、菅原さんは、

「君もやはり人間だな。気をつけて行きたまえ」

どこか穏やかな声でそう言ってくれました。

その声に応えることはせずに、自動ドアを抜けて外に出ます。

肌に纏わりつくような温い風が舐めるように僕の身体を撫でていきました。不快です。

「これがいいかな」

燃料もほぼ満タン。状態も良好そうな一台の原チャリを見つけ、跨

ります。

ここを開けて、あれをこつやっつて以下中略でエンジンが掛かりました。

「……………生きてる友達、いますかねえ」

友達が生きてる望みは限りなく薄いです。

僕がこれから行おうとしているのは、ただの自己満足に過ぎません。それでも僕は一通り友達の家と街を廻ります。

無事に友達と出会えればよし、出会えなくてもそれでよし。

生きていたら救います。手遅れのようにしたら殺します。死んでいれば放置します。

それが、今の僕にできることです。

「……………願わくば、一人でも多くの友達が生き残っていますように」

僕が一人乗りの原チャリをチョイスしている時点で、諦めているようなものですが。

それでも、願うだけなら体力も労力もお金も弾薬も無料ですし……………ね。

番外編その2-2

P M 20:13

軽快に原チャリを飛ばしながら、有象無象の感染者を避けつつ街を巡回します。

人間の感染者は基本的に動きが鈍いので避けるのは簡単でしたが、少々厄介だったのが四足歩行の動物でした。

特に大型犬や猫等は体格が巨大化し、動きも従来より俊敏になつているので手を焼かされます。まあ、そのためのシヨットガンだったので、大して手間はかかりませんでした。

そんなこんなで巡回している途中で、三人いた友達のうち、二人と出会うことができました。

一人目は転校してきたばかりの僕に対して、一番最初に話しかけてきてくれた男友達のA君です。

よく、一人暮らしの僕の家上がり込んで冷蔵庫のお酒を飲んで酔っ払っていました。その度に幼馴染が迎えに来てくれた幸せ者です。

発見した時には既に手遅れで、自宅周辺を他の感染者と一緒に徘徊していました。遠慮なく額を撃って始末しました。

二人目は同じクラスであり、A君の幼馴染でもあった女の子友達のBさんです。

二人の掛け合いは夫婦漫才みたいで、見ていて飽きませんでした。いつも明るく笑顔を絶やさない活発な女の子で、時々、僕は女の子達の間で人気があるとかないとかよく分からないことを言ったりしていたのが印象的です。

A君とはお隣さん同士で、部活の朝練がない日などは一緒に登校していたようです。A君が僕の家で伸びてしまったとき、部活帰りな

どによく彼を迎えにきていた殊勝な女の子でもあります。

僕が彼女を居間で見つけたときは既に息絶えていました。全身を食いちぎられて。死体になってから結構経つようですが、感染者として徘徊していないことから体内に抗体を持っていたものと思われま
す。放置しました。

そして僕は今、三人目の友達の家を目指しているところです。

ここまでの戦果はなし。覚悟はしていましたが、結構辛いです。今までこんな感情を抱いたことはなかったのですが。

それだけ、ここで過ごした4か月という月日が、僕の中で重要な部分を占めていたということなのでしょう。

……見えてきました。三人目、Cさんの自宅です。

周囲に感染者の姿は見えません。餌を求めて、集団でどこかへ移動してしまっただけでしょうか？そういえば、この近くには焼き肉店がありましたね。もしかしたら、肉の匂いに感じたのかもしれない。

玄関前の適当な所に原チャリを止めて、インターホンを鳴らします。まあ、鳴らす必要があるとは思えませんが念のためです。

敢えて不法侵入して、何故かCさんの着替えシーンを覗いてしまうというビックリドッキリイベントフラグを期待してみてもよかったです。現実との落差に心を折られてしまいそうだったのでやめておきました。

「…………おや？」

家の中に気配が…………感染者でも残っていたんでしょうかね。

とりあえずM3は嵩張るので原チャリの元に置いておき、グロック18Cを構えました。

そして、気配を確かめながらゆっくりと扉を開けます。

「お邪魔しまーす」

そういえば、Cさんのお宅にお邪魔するのは……約一日ぶりですか。両親がいない僕を不憫に思ってくださったCさんの両親様に、よく夕食をご馳走になっていたんですよ……。美味しかったなあ……。こんなことになるなら……。もっと……。味わって食べておけばよかったです……。

む、いけません。エージェントたる者、涙で視界を遮るとは愚の骨頂です。

……こんな僕にもまだ涙が残っていたなんて予想外でした。まあ、幻ということにしておきましょう。

『あああああ……』

「おっと」

ダイニングへお邪魔したところで、物陰からお母さんのご登場です。40過ぎだというのに、まるで二十歳後半のように若々しかったお母さんは見る影もなく。

美しかったお顔は醜く歪み、白眼を露呈するその様相は見るに堪えません。

「僕からの、せめてものお詫びと……お礼です」

右手を真っすぐに伸ばし、グロックを水平に構え、右手首を左手で押さえるようにしてトリガーを引きました。

ダァンッ！

一撃で額を撃ち抜かれたお母さんは、腐った脳漿と血を撒き散らしながら地面に沈んでいきます。
……良くしてもらった恩人をこの手で撃つのは、やはり慣れるものではありません。

ガタッ

「む？」

先ほどから気配は感じていましたが、今の物音は……。Cさんの部屋から？

感染者として活動を開始したのでしょうか？

どちらにせよ、確認しないことには始まりません。

僕はダイニングを去り、廊下に出て階段を昇り始めました。

木製の階段を踏みしめる度に、特有の軋みが響きます。

そして、軽く辺りを警戒しながらもCさんの部屋の前に辿り着きました。

「……」

ドア越しですが、確かな気配と息遣いが聞こえます。肉体が活動しているのは確かなようです。

まあ、この部屋の中にいるのがCさん本人とは限らないし、まだ人間でいるのか、それとも感染者になってしまったのかも定かではありませんが。

固まっただけでも仕方ありません。僕は思い切って扉を蹴破り、部屋の中に踏み込みました。

「きゃあああッ！ー！」

「ッ！？」

人間らしい悲鳴が聞こえました。
とても聞きなれた人物の声です。

「来ないでえッ！！来ないでよー！！！」

この反応はともじやありませんが、感染者とは思えません。
半狂乱になりながら物を投げつけてくるこの人物こそ……。

「無事だったんですね……理恵さん」

「ふえ？」

思わず脱力してしまいそうなのこの返事。

まさしくCさんこと羽野倉理恵はのくわさんに違いありません。

「あ……あす、か……君？飛鳥君なの？ヒック……ヒック……」

「まさしく、金城飛鳥です」

「ふ……うう……うわあああん！」

涙の軌跡を残しながら、僕の胸に飛び込んでくる理恵さん。

何ですかね……何で僕は……今……泣きそうになっているんです
よつか。

「こわ……恐かった……恐かったよう！！ひぐ……えぐ……うう、
ううううー！」

「……」

泣きじゃくりながらしがみ付いてくる彼女に、僕は掛ける言葉が見
当たりません。

そうですね、掛ける言葉が見当たらないのなら、素直に思ったこと

を口にしてみましようか……どね。

「理恵さん……貴方が無事で……本当に良かった」

「……飛鳥君も泣いてるの？」

「は……？」

そう言われて、思わず頬に手を当ててみると……何やら液体が。舐めてみると、それはしょっぱいものでした。なるほど、これが俗に言う目から汗が出るというやつですね。風説だと思っていました。

「泣いているのではありません。目から汗が出ているだけです」

「それを……世間一般では”涙”って言うんだよ？」

「……なんと」

涙を零しながらも、笑顔を見せてくれるという高等技術を披露してくる理恵さんに敬意を表し、素直に僕の頬に流れる液体は涙だと認めることにしました。

涙……か。どうやら幻ではなさそうですね。

極々自然に、僕は理恵さんを抱きしめていました。理恵さんの女の子らしい香りが鼻腔を刺激します。

「本当に良く無事でしたね。いい子いい子です」

「……」

思わず頭を撫でてしまう僕の手を払うことはせず、気持ち良さそうに頬を緩めてくれる理恵さんに、胸が高鳴ってしまいました。ところが

「ッ……わ、私に近づいちゃダメ……！」

突然、彼女に突き飛ばされてしまい、啞然としてしまいます。

そんな僕の視線から逃れるように、彼女は左腕を右手で隠して顔を背けました。

……もしや。

「理恵さん、隠してる左腕を見せてください」

と言いつつ、抵抗させる暇は与えません。

離れた彼女を再び抱き寄せて、右手を左腕から引っぺがします。

理恵さんも、隠しても意味はないと悟ったのか大人しく従ってくれました。

「……この噛み傷は……お母さんですか」

「……」

唇を噛みながら俯く理恵さんの反応からして、ビンゴでしょう。

噛まれてからどれくらい経つのかはわかりませんが、傷口の腫れ具合からしてあまり余裕はなさそうです。

僕はすぐさまブレザーのポケットから、ウィルス特效薬が入った注射器のケースを取り出しました。

「それ……なに？」

「貴方の身体に入ったウィルスを除去し、抗体を作ってくれる特效薬です」

「……本当に？」

疑心暗鬼……ですか。実の母親に喰い殺されそうになったのですし、無理もありませんけど……。

「この薬を受け入れるかどうかの判断は貴方に任せます」

「……怖い」

そう呟き、震える手で僕のブレザーの端をギュッと掴んでくる理恵さん。

僕はそんな彼女の頭を抱き寄せます。

「僕から貴方にいえることはただ一つです。僕を……信じてください」

何とも恥ずかしい台詞をのたまってしまったような気がしますが、ここは敢えてスルー推奨です。

「……うん」

僕を信用してくれたのでしょうか。それとも、このままではいずれにしても助からないと腹を括っただけでしょうか。どちらにせよ、理恵さんは静かに頷いてくれました。

「痛いですけど、我慢してください」

小さなポケットケースから消毒液を染み込ませたガーゼ取り出し、彼女の腕に塗り付けます。

そして、注射器のカバーを外してから容器の中の空気を抜き、その細い腕に突き刺しました。

「ッ！！」

僕は理恵さんが唇を強く噛み過ぎないように、左手の指を彼女の口の中突っ込みます。

そのおかげもあってか、理恵さんは僕の指を噛まないように何とか

我慢してくれましたようです。

「終わりましたよ」

僕は注射器を引き抜き、そこらへんにポイ捨てしました。

僕に医術の心得などありません。注射にしても、丸つきり素人です。とても痛かったでしょう。理恵さんは先ほどとは別の涙を浮かべていました。

「これでよし」

そんな彼女の腕に特殊な絆創膏を貼り付けた後、噛み傷がある個所に消毒を施し、包帯を巻いて治療を終えました。

まだ涙を浮かべている理恵さんの頭を撫で撫でしてあげます。

「痛かった……」

「すみません。でも、もう大丈夫ですから。これで感染者に噛まれても、貴方が感染することはありませんよ。安心してください」

「……」

「さ、逃げましょう」

そう言って、理恵さんを連れてこの場から脱出しようとしたのですが。

「待って。その前に教えて？」

「何ですか？」

「飛鳥君は……何者なの？」

「……」

ま……その疑問は当然ですよ。

僕が銃を持っていること。薬を持っていること。この現状を把握しているような態度。理恵さんからすれば、全てが不可解でしょう。

「……どうしても、知りたいですか？」

「うん」

理恵さんは意志の強い眼差しで僕の瞳を射抜いてきます。

「どうやら、本気の様子です。」

「ならば、道中で話すことにしましょう。それよりも、今はこの場から脱出することが先決です」

「……わかった」

同意してくれたところで、僕は先に歩き始めようと思いました。そこで

「……」

無言で理恵さんが僕の左手を握ってきたことに何ともいえない感慨を覚えながらも、少し動きにくいという不満を押し隠したところで、外に複数の気配を感じました。

「どうやら、食事を終えた感染者が自分のテリトリーに戻ってきたようです」

「ッ！？」

外から聞こえてくる多数の呻き声に脅えの色を隠せないでいる理恵さんを抱き寄せて、優しく背中を叩いてあげました。

「恐怖に囚われるな、なんて無理は言いません。ただ、僕の姿を見

失わないでください」

「……うん」

僕の胸に頭を押しつけながら、深呼吸を繰り返す理恵さん。そして、彼女が落ち着いたところで、

「大丈夫です。貴方は僕が護ります」

窓の外に身を乗り出し、外に群がる感染者達の頭に向けてグロツクのトリガーを引きました。

番外編その2 - 3

理恵さんの部屋から銃弾をばら撒き、外の感染者を全て始末してから、僕たちは改めて手を繋いで羽野倉家を後にしました。

「後ろへどうぞ」

「わかった」

エンジン付けっぱなしの原チャリに跨り、僕の後ろに理恵さんを乗せます。

「しっかりと掴まってくださいね」

「はい」

ギュツと豊かな双丘が僕の背中に押し付けられます。

うーん、理恵さんって思ったより胸あるんですね。柔らかいです。

つとと……聞かなかったことにしてください。

原チャリは二人乗り禁止なので、普通二輪の座席に比べてあまり余裕がありません。必然的にお互いの身体が密着してしまうのは仕方のないことなのですよ。

まあ、生き残ってる友人なんていないだろうって諦め半分で原チャリをチャイスしたのがそもそも問題なのですがね。

「さ、発進しますよ。掴まってください」

「……うん」

切なそうな表情で自宅を見つめる理恵さんの瞳には、溢れんばかりの涙が溜まっていました。

「……さようなら。お父さん、お母さん」

……敢えて聞かないようにしていたのですが、今のでハッキリしてしまいました。理恵さんは一人ぼっちになってしまったようです。僕と同類ですね。

これ以上ない凄惨な死に別れという点では、僕は引け目を感じざるを得ませんが。

「……行きます」

そう言つて、彼女の未練を断ち切らせるように、僕は原チャリを飛ばさせました。

後ろでは理恵さんが嗚咽を漏らすまいと必死になって堪えているようです……無理しなくてもいいんですけどね。

「泣いていいですよ」

「……え？」

「泣きたいときは泣くのが一番です。こういう状況なら、尚更……」
「……ヒック」

これが恐怖に唆された涙なら遠慮なく一喝してるところですが、今、理恵さんが流しているのは……尊いモノですから。

「誰かのために流す涙だからこそ、今、泣いておくのが一番ですよ」

「……飛鳥君は強いんだね。それに、とても優しい人」

「僕は強くなんでありません。それに、貴方に優しくされた分の恩を返してるだけですから」

「そういう、変に気を使わないところなんか……私にはとても優しくみえるよ？」

「参りましたね、これでも大分気を使ってるつもりなんですが」

理恵さんはクスツと笑ってから、頭を僕の背中に押しつけてきました。ミラーに映る、風に舞う彼女のセミロングの髪が……泣き叫んでいる彼女の心のように見えたのは、あながち間違いではないでしょう。

「ねえ……お言葉に甘えて……ちょっとだけ泣いていいかな？」

「存分にどうぞ」

「背中……借りるね？」

「僕の背中の一つや二つ、いくらでもお貸ししますよ」

僕の腰に回された理恵さんの両腕に力が入ります。

「……ありがとう」

その言葉を発した直後、彼女はまるで捨てられた赤子のような声で泣きました。

そして、理恵さんの泣き声に誘われたかのように、細道の両脇に聳える木々たちの葉がざわめきます。

まるで、彼女のために世界が泣いているようです。

それからしばらくの間、理恵さんは声をあげて……ただただ、涙を流していました。

P M 20:51

「ええ、ハイ。日向橋まで迎えにきてください。よろしく願います」

僕は携帯を閉じると、それをブレザーの内ポケットに仕舞い、不安

そうに上目遣いで見つめてくる理恵さんの頭を撫でてあげました。

「パンクなんてツイてないね……」

「仰る通りです……全くもって面倒なことになりました」

羽野倉家を出発してから約20分が経過し、ようやく田舎道のような細道を出て、河川沿いに原チャリを走らせていたときでした。なんと、原チャリの後輪がパンクしやがったのです。

河川沿いに感染者の姿は見当たらなかったのになんとか助かりましたが、ここが一般道だったらと考えると背筋が凍る思いです。

「これから……どうするの？」

「自衛隊が日向橋まで迎えにきてくれるそうです。道中で目ぼしい乗り物を探しつつ、そこまで向かいます」

「日向橋って、県境にある？」

「はい。そこまで辿り着けば、あとは安全です」

「……途中で化け物とかに襲われたりしないかな？」

「確証は持てませんが、この現状を見る限り恐らく大丈夫でしょう。感染者を避けるために、わざわざ市役所へのルートを破棄して河川沿いの道を選んだのですから、そうホイホイ出てこられたら堪ったものではありません。」

「ま、仮に襲われたとしても、こっちは武器がありますからね。何とかかりますよ」

理恵さんの怯えを少しでも軽減させるために、敢えて微笑んでみました。上手く笑顔を作れたかは自信ありません。

「なんだろう……頼りない台詞なのに、飛鳥君が言うとお心できる」

「それは重畳です。僕も無理してほほえ」

「でも、あまり無理して笑わないほうがいいかな。今の笑みはちょっと……」

「……以後、慎みます」

どうやら、僕には作り笑いする才能がないようですね。

まあ、仕方ありません。

「さ、そろそろ行きましょうか」

「うん」

僕の左手を握ってくる理恵さんの手を握り返し、役立たずの原チャリを放置して歩き始めます。

「そういえば、さつき街のスピーカーで市役所に集まるように指示してた声って、飛鳥君でしょ？」

「……聞かれてましたか」

「飛鳥君の話だと、市役所は安全なんですよ？なんで市役所とは反対方向に向かったの？」

「本当は市役所に向かう予定だったんですけどね。二人乗りの原チャリで感染者の数が多し国道を戻るよりは、感染者のいない河川沿いの道を利用して、県境の少し先で展開してる自衛隊と合流したほうが安全で確実だと思っただけなんですよ」

「そっか……足手纏いの私がいるから、市役所へ行けなくなっただね」

そんなこと一言も言っていないのに。

理恵さんの自虐的な発言に少しムツときてしまった僕は、敢えて返事をしないことにしました。

そんな僕を少し潤んだ瞳で見つめてくる理恵さん。

……まったく、僕の返答に何を期待しているんですかね？

「……貴方を少しでも危険から遠ざけたかったんですよ。別に足手纏いだとか思ってますし、仮に足手纏いであっても関係ありません」

ここで僕は彼女の手を少し強く握って、振り向きました。理恵さんの驚いたような顔が少し滑稽で、でも可愛くて、何だか笑えます。

「理恵さんは、僕が護るって約束したんですからね」

護ってあげたいと思えた貴方だからこそ、僕は……。

「……その笑顔はズルいよう」

ふと呟きのようなモノが聞こえたので、再び振り返ってみると、そこには耳まで真っ赤にしなから俯く理恵さんの姿が。

「何か言いました？」

「何でもないもん！」

「そうですか？なら」

「……？どうし　ッ！？」

理恵さんが疑問を口にし終わる前に、僕は慌てて彼女の身体を抱き寄せて地面に押し倒します。

その瞬間、茂みの中から目にも留らぬ勢いで坂を駆け上がってきた一匹の動物が、頭上を掠めるように飛びかかってきました。

周りが暗いのと、突然の奇襲だったので姿はよく確認できませんでしたが、風圧からしてかなりの体躯を誇っているようです。少なく

とも、人ではないでしょう。

危うく頭を呑みこまれるところだった理恵さんを抱きかかえながら、地面を転がるようにして体勢を立て直します。

「な……なに？コレ」

震えながら僕を抱きしめてくる理恵さんの頭を撫で撫でしながら、無粋な通り魔を観察するついでに睨み据えました。

『シャアアアアツ！！』

2メートル程の体躯で筋肉組織が剥き出しの身体、両手から伸びた鋭利な5本の爪、尻尾……のようなもの、四足歩行、二つの頭にそれぞれ一つだけ存在する巨大な目玉。

「これは 新井さんが言っていた二次形態の感染者……」

「二次形態……？」

「簡単にいえば、ゾンビの進化バージョンです」

「うっ……」

「僕が奴を引き付けますから、ゆっくりと7メートル程離れてください。決して大きな動きを見せてはいけませんよ？」

「う、うん……わかった。気を付けてね」

化け物のグロテスクで醜悪な姿態に吐き気を催しながらも、口元を押さえて懸命に堪える理恵さんをそつと引き剥がし、二歩ほど前へ進み出ます。

無防備な彼女を狙わせないように、敢えて大げさなモーションでショットガンを構えました。

そのまま、警戒しているのか硬直したまま動かない化け物に向けて散弾を撃ち込み。

『シャアアッ!!』
「ッ!」

突然の跳躍から爪の振り降ろしですか。空気を裂く鋭い音が素敵すぎますよ、コノヤロー。

反射神経の反応に逆らわず、後方転回で避けます。

おかげでトリガーを引き損ねてしまいました。まあ、距離を稼ぐためにも仕方なかったのですが。

しかし、ここがプロの腕の見せ所。

即座に体勢を整え、化け物の動きが止まったところをフロントサイト内に収めて、今度こそトリガーに指を掛けます。

重い銃撃音が辺りに反響し、派手なマズルフラッシュが瞬きました。

散弾は化け物の右肩を抉り、汚い血飛沫を飛び散らせます……が、致命傷には至りません。

直前で、僕から見て右に飛ばれて射線から逃げられてしまったのが原因です。

ガシャコッ!

即座にレシーバーをコッキングさせて次弾を装填し、ショットガンを水平に構え、フロントサイトとリアサイトに化け物を収めます。

一発目が発射されてから、ここまでの動作は約0.4秒。

ですが、僕がトリガーを引く前に相手に先手を打たれてしまいました。

目にも留らぬ動きで縦横無尽に駆け回り、僕の視線を翻弄しつつ、僕の首目掛けて、その鎌のような爪を振りかざしてきます。

まともに喰らえば一撃で首が胴体から離れてしまうことは必至。

その死神を思わせる攻撃を紙一重で回避しつつ、僕は化け物の身体能力に舌を巻いてしまいました。

残像すら残すその速さ、恐らく地球上最速でしょうか。

しかし

動きは真似……できなくもないですがそれは敢えて置いといて、見切ることは簡単です。

化け物の爪が僕の首を掠め、すれ違う瞬間。

僕は後ろを見ないままショットガンの銃口を背後の化け物に向け、トリガーを引きました。ほぼ接射です。

『イギヤアアツ!!』

耳を劈くような甲高い悲鳴。元が人間とはいえ、最早、その奇声は正常な人間が出せる音域ではありません。なんとも醜い絶叫ですね。レシーバーをコッキングさせながら後ろを振り向いてみると、右脇腹あたりが大きく抉れている化け物が地面をのた打ち回っていました。

ふむ……人としての理性や意識はなくとも、痛覚はあるんですね。ということは、初期形態の方々にも痛覚はあるのでしょうか？彼らはあまり痛がってるように見えませんが……興味深いです。

『……………』

脇腹の痛みから立ち直ったらしい化け物は、その大きな一つ目で僕をじっと見据えながら警戒しています。

ショットガンを恐れているのでしょうか、威嚇してくるだけで大し

た動きを見せなくなりました。

これはチャンスです。遠慮なくサイト内に化け物を収め、照準を定めめます。

「む？」

目の前の化け物の他にもう一つ殺気が増えた？

『ギシヤアアアツツ！！！！』

「！！！」

「飛鳥君ッ！？」

今までずっとこちらの隙を窺っていたようです。

ここぞとばかりに、暗がりから出てきた二匹目が有無を言わせぬ勢いで襲いかかってきました。

背中から倒れ込むようにして新たな襲撃者の不意打ちを避け、こちらの際を突くように飛びかかってきた一匹目の化け物の爪をシヨットガンのフレイムでなんとか受け止めます。

完全に押し込まれて身動きが取れなくなる前に、涎を垂らしながら大きな一つ目で熱い眼差しを送ってくる不埒な輩を蹴り飛ばしました。

そのまま身体を反転させて地面に両手を着き、下半身を宙に浮かせつつ、腕力、腹筋、背筋を上手く連動させて脚を回転させます。

遠心力を利用して、一匹目と連携するように僕の背後から飛んできた二匹目の化け物の顔面を蹴り上げました。

蹴り上げた勢いそのまま身体を捻り、両腕で身体を押し上げて体勢を立て直します。

それと同時に二匹の化け物も身体を起こしました。

「うーむ……会心の蹴撃だったんですけどねえ……」

人間相手なら顔面の骨を粉碎してるくらいなの。

まあ、相手が相手だからどうしようもないんですけど、なんか自信失くします。

「ま、こちらとしてもそう簡単に貴方達の食料になるワケにはいかないんで」

と、余裕ぶりつつも、内心では冷や汗を掻いたりする僕です。理恵さんに注意が向いてなくて良かったと心底安堵してます。

いくら戦闘中だったとはいえ、ここまで接近を許してしまうとは……事が済んだら、一度徹底的に鍛え直さないといけないようですね。

『シヤアア………』

『ギシヤアアアツ！』

お互いの隙を埋めるように、絶え間なく爪を振りかざしてくる化け物二匹をいなしながら、僕は比較的動きが鈍い負傷中の化け物に向けて、シヨットガンを構えました。

僕に向かって飛びかかってくる前にこちらから距離を詰めて、動きを牽制します。

二匹目の奇襲を身を屈めて回避し、そのまま頭上を掠めていく化け物に構うことなく、僕は一匹目に肉薄、そのまま二つあるうちの（僕から見て）右の頭を零距离から撃ち抜きました。

『ギイヤアアア！！！』

「やっぱり、頭一つ潰したくらいじゃ死にませんか」

左の頭部を粉碎されて激しく仰け反りながら絶叫する化け物を眺め

つつ、そいつの残った頭を踏みつけて大きく飛び越えて距離を取ります。

それにしても、息の合った連携といい、気配の殺し方といい……狩猟民族である人類の本能が回帰でもしているんですかね？

本当にそうであるのか、真相は定かではありませんが、とりあえず今言えることは、この化け物ほとんどもなく脅威だということ。

遠距離からの銃撃ならばまだ勝ち目はありますが……一対一で肉薄されれば、よく訓練された兵士でも生き残ることは難しいでしょう。

ま、なんにせよ、そろそろ終わらせましょうか。

少し長居し過ぎましたし、なにより……飽きました。

未知の敵に対して己の力量を試したくなるという僕のツマラナイ自己満足も満たされたことですし。

『『シヤアアツー！！』』

僕の雰囲気が変わったことを本能で悟ったのか、全くの同タイミングで飛びかかってくる二匹の化け物。

それに対し、僕は身を低くしながら化け物の下を駆け抜け、側転して振り返ります。

エンドルフィンが大量に分泌され、徐々にスローモーションになっていく僕の世界。

上下が逆になった視界の中で、遠ざかっていく二匹の化け物のうち、ちゃんと頭が二つある化け物に向けてショットガンのトリガーを引きました。

間延びする銃声と共に発射される弾丸。今の僕はその軌跡まで見極めることができます。

そして、ショットガンの最後の一発であるスラッグ弾は、狙い通り

に化け物の左の頭部を爆散させました。

化け物が体勢を崩して派手に転倒し、引っくり返って悶えるのと同じ時に、僕はショットガンを放り捨てながら体勢を立て直します。

間髪入れずにブレザーの中で温めていたコンバットナイフを左手で抜きながら一步を踏み出し、宙に放って逆手に持ち替え、こちらに振り返って再び跳躍しようとする（最初に対峙した方の）化け物の頭をすれ違い様、一息に切断。

とうとう頭を二つ失って崩れ落ちる一匹目には見向きもせず、その脇を駆け抜けながら右手でグロツク18を抜き放ち、跳躍します。未だ悶えている二匹目の胴体を踏み砕くように着地しながら、そつとしゃがみ込んでグロツクの銃口を残された頭部に向けて構えました。

ゆっくりと、されども連続して放たれる9mmのパラベラムは、化け物の頭を容赦なく蹂躪していきます。

そして マガジン内の弾丸が撃ち尽くされると同時に、僕は化け物の胴体から軽く前に跳躍して離れました。

「…………ふう」

すーっと夢から覚めるように世界が元の加速度を取り戻し、それと合わせるように僕の身体に虚脱感が訪れます。

「お待たせしました。さ、行きましょう」

時折、身体を痙攣させる化け物を道の脇に蹴り飛ばしながら、僕は後方で震えていた理恵さんにおいておいでと手招きました。

しかし、理恵さんは僕の顔を見つめてくるだけでその場から動こうとしません。

…………どうしたのでしょうか？

「もしかして、怖がらせてしまいましたか？」

「そ、そうじゃないの……」

そう呟き、地べたに座ったまま無言で僕に両手を差し伸べてくる理恵さん。

その顔は幾分か紅くなり、恥ずかしがっているようにも見えます。

あ、なるほど。腰を抜かしてしまったんですね？

「歩けそうですか？」

「……………」

理恵さんは顔を俯かせ、力なく首を横に振ります。

まあ、年頃の女の子がこんなショッキングな惨殺シーンに耐えられるほうがおかしいのかもしれない。

「仕方ありませんね」

そう言っ僕は理恵さんの前に屈み、両膝を揃えさせて、その下に左腕を入れました。

「キヤッ!？」

耳に届いたか弱い悲鳴を無視し、右腕で彼女の肩を支えます。

「よいつしよ……っと」

「え?えっ!?!飛鳥君!?!ヤダッ降ろして!」

突然のお姫様抱っこに困惑する理恵さん。恥ずかしそうに顔を赤らめながら、僕に抗議してきます。

どうやら、お姫様抱っこはお気に召さなかったようです。

「余計な御世話でしたか？……すみません」
「あつ……」

僕が腕の力を抜いて理恵さんを降ろす前に、理恵さんが僕の首に腕を回してガッチリホールドしてきました。

「あの……そんなことされたら降ろせないんですが……」
「……………」

理恵さんは僕の抗議を完全にスルーし、さらに腕の力を強めて僕の胸に顔を押し付けてきます。

「あの……降りたかったのでは？」
「……………」

スルーです。完膚なきまでにスルーされました。

「参りましょうか。お姫様」
「……………苦しゅうない」

無理矢理にでも降ろそうかと思いましたが、とりあえず僕に向けられた笑顔が可愛かったので許します。

番外編その2 - 4

理恵さんを担ぎながら歩くこと20分弱。

突発的な感染者との遭遇もなく、無事に自衛隊の野営キャンプに辿り着くことができました。

周りには様々な近代兵器が所狭しと並べられ、異常な空気を醸し出しています。

「うわぁ……凄い。戦車とか銃を持った人達がいっぱいいる……」
「日本の盾と言われる自衛隊の中でも、彼らは精鋭部隊ですから」

といっても、理恵さんは恐らく自衛隊員達よりも生の兵器に慣れていたのでしょうがね。

「そろそろ歩けますよね？」
「ん……もうちょっとだけ……」

うっ、思わず頷きかけてしまいましたが、ここは心を鬼にせねば。

「人に甘えてばかりでは、いざというときに自分で行動できませんよ？」

「……ごめんなさい」

シユンと落ち込んでしまった理恵さんを降ろし、頭を撫でてあげつつキャンプ内にいるハズの指揮官を探します。

しかし、僕たちの周りには忙しそうに駆け回っている有象無象の…

…コホン。重装備の自衛隊員達で犇めています。
こども人が多くてはなかなか思うように探せません。

丁度キャンプ内の中央辺りまで辿り着いた頃でしょうか。一向にそれらしき人物が見当たらないので、適当な隊員に声を掛けて、指揮官の居場所を聞き出そうかと考え始めたときでした。

慌ただしくバリケードを築き上げる隊員達の邪魔にならないように、道の脇を進みながら彼女の手を引いて歩いていると、一際大きなキャンプの中に一人だけ正装の自衛隊員がいたのです。

その人物に対し、皆が畏まって対応することから恐らく彼……いや、彼女が現場の指揮官なのでしょう。

「すみません、ちょっといいですか？」

「はい？あ、民間人の方？」

おっとりした物言い、理恵さんよりもボリュウムがありそうな胸、間違いなく女性ですね。

階級は……二佐ですか。珍しい。

「僕は違いますよ？先程連絡させてもらった者です。僕の後ろにいる彼女が、真正正銘の一般人」

「……………」

僕の背中に隠れている理恵さんを促し、指揮官の前に立たせます。

「貴方が保護した生き残りはこの子だけですか？」

「はい」

「わかりました。丁度輸送へリが出るところなので、中継基地まで

お送りするということですのでよろしいですか？」

「よろしく願います」

「では、時間になったらお呼びしますので、あちらの仮設テントでお休みになっていてください」

「わかりました」

理恵さん共々指揮官に頭を下げ、仮設テントに向かいました。

途中で、理恵さんが僕の腕に抱きつきいてきます。

「何だか、穏やかな人だったね。意外だったかも」

「いえ、正直なところ、自衛隊内でああいうタイプの女性は珍しいですよ」

「そうなの？」

「はい」

彼女の驚きも最もでしょう。

自衛隊とそれなりの関わりを持つ僕でさえ、現場の指揮をする立場にあるにも関わらず、あのように物腰柔らかい女性と出会ったのは初めてなのです。

そのような会話をしていたら、あっという間に仮設テントに着いてしまいました。

ま、あの指揮官が立っている位置から100mも離れていないので、当たり前といえは当たり前なのですけど。

「……誰もいないね」

理恵さんの沈んだ声が虚しくテント内に木霊します。

テントの中には簡易ベッドとパイプ椅子敷き詰められており、僕たち以外に誰一人として利用者の姿が見えません。

テントの隅っこに設置された簡易型の冷水機だけが、場違いのよう

に自らの存在を誇示しているだけでした。

「恐らく、生き残った住民の方々を収容するためのテントだったのでしょう」

「……………誰も助からなかったんだね」

「いえ、誰もというワケではありませんよ。少ないながら、救出できた市民達を既に市役所で保護しています。ただ、この野営キャンプに辿り着けた生存者はいなかった、それだけです」

「……………そう」

暗い面持ちの理恵さんを促し、とりあえず入り口に一番近いベッドに腰掛けさせます。

それから、せっかくなので冷水機に備え付けられていた紙コップを拝借し、冷水で満たしたものを差し出しました。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

紙コップを受け取った理恵さんは一口だけ水を口にすると、

「ねえ、飛鳥君。これから私はどうなるの？」

それまで俯けていた顔を上げて、僕に問いかけてきました。

誤魔化す理由もありませんし、ここは正直に話しておくべきでしょう。

「まず、国が用意した家屋を失った民間人用のマンションまで送られます」

「……………それで？」

「生き残った方々には国から保障金が提供されます。詳しい金額ま

では知りませんが、それだけで一生豪遊しながら生きていける金額です。あとはその金を持参して親戚の元を訪れるもよし。国に用意されたマンションにそのまま移住してもよし。国に用意されたマンションは都心に近い一等地に建てられた高級マンションですし、家賃の支払いも免除されますから、親戚に頼るよりは幾分かマシだと思いますよ。一人暮らしの方には期間限定で専用のアドバイザーも付けられるという話ですし」

僕からすれば全くもって垂涎モノの話です。

仮にですけど、親元から離れて安アパートの一人暮らし、なおかつこのバイオハザードを生き残れたという人間からすれば、棚ボタ……とまではいいませんが、破格の保障ですよ。

しかし、理恵さんの表情は浮かばれません。

まあ、保障がどれだけ好待遇でも、家族を一夜のうちに失ったという悲しみの前には当然霞んでしまうでしょう。

「まるで、予めこういうことが起こるって知ってたみたいに用意が
いいのね」

おっと。

僕は彼女を見縊っていたようです。

意外と冷静に物事を考えられるようですね。迂闊でした。

……口を滑らせてしまった以上、仕方ないですね。

僕は一呼吸置いてから、理恵さんの瞳を直視しながら口を開きました。

「その通りですよ。我々は予めこのバイオハザードが起こる”かも
しれない”という前提で計画を進めてきましたから」

その瞬間、彼女の表情が怒りとも悲しみともとれる複雑な表情を見せました。

「じゃあ、なんで教えてくれなかったの！？もつと早くからこういうことが起きるかもしれないって知ってたら誰も死なずに済んだかもしれないのに！」

堰を切ったようにいきり立つ理恵さん。まあ、当然の反応ですね。

「じゃあ理恵さんは、僕が予め『これから人が人を喰らう凄惨な事件が起こるかもしれないので、今のうちに逃げてください』と言っていたら信じてくれてましたか？」

「それは……………」

そんなB級ホラー紛いな真実を話したところで、一笑に伏されるのがオチ。信じる人間など誰一人としていないワケがない。

それに

「この際ですからハッキリ言っておきましょう。僕は最初からこの街を見捨てるつもりでした。他人がどうなるかと僕には知ったことではないし、見ず知らずの人達のために命を賭けて護ろうといった気概も持ち合わせてはいなかったのです」

「……………」

僕に失望したのでしょうか。理恵さんは唇を噛みながら俯いてしまいました。

でも、僕がこの街の住民を見捨てるつもりだったのは事実です、嘘を吐くつもりは毛頭ありません。

それに、この場で理恵さんが僕に抱いている感情を砕いておくほう

が、彼女のためであるような気がします。

「飛鳥……」

「何ですか？」

眼尻に涙をいっぱい溜めながら、それでも僕を見つめてくる真つ直ぐな瞳。

拒絶の言葉でも口にするつもりですかね。

ま、僕はそれで一向に構わないですケド。その方が理恵さんのためなんですし。

ん？今、呼び捨てにされたような……。

「じゃあ、なんで私を助けにきてくれたの？」

「……ただの個人的な感傷です」

半分本当で、半分嘘ですけど。

「これまで僕は任務の都合でかなりの回数の転校を繰り返してきました。そのおかげで、僕はいつも一人だった。どうせすぐ別の任務で転校することになるのだし、友達なんか作っても任務の邪魔になるだけだから」

そう。一人の方が気楽だし、余計な厄介ごと増えずに済む。ただそれだけ。

「初めは”今までどおり”任務遂行のために一人でいるつもりだったのです」

「……」

「しかし、そこへ貴方達は僕に声を掛けてきた」

「……」

「僕が一言『鬱陶しいので近づかないください』と言えば、大抵の人間は僕に近づかなくなるのに……貴方達だけは違った」

理恵さんは昔を思い出しているのか、その表情に少しだけ影を覗かせます。

「最初は本当にただ鬱陶しかっただけなんですけど……いつの間にかそれが僕にとって当たり前になって、いつしか僕も”こういうのもいいな”って思えるようになって……」

こんな日々が続いてくれたら、どれだけ幸せだろうと考えてしまっていた。

「でも……あと少しでこの任務も終わるといふところでバイオハザードが起こってしまった……本当は僕が一般市民を助けるといふのは規定違反なんですけどね……どうしても理恵さん達だけでも助けてあげたかった」

「規定違反を犯してまで、どうして私たちを……？」

「僕の……初めての友達だったから　結局……間に合ったのは理恵さんだけでしたが……」

「　　ッ……!」

理恵さんは言葉を詰まらせたように喉を引きつらせると、声も無く泣き始めました。

まあ、悟と美穂さんの末路を知ってしまったては無理ありません。しばらくそっとしておいてあげましょう。

「ちよつと外に出てきますね」

そう告げて、仮設テントから外に出ようとしたのですが、

「もう……会えないのかな？」

彼女が唐突に零した一言が、僕をこの場に引き止めます。

「唐突に何を……？」

「よくよく考えてみたらね……私、一人ぼっちになっちゃったんだなって……」

寂しげな笑みと共に、理恵さんは言葉を紡ぎます。

「お父さんもお母さんも悟も美穂も、みんなみんな死んじゃって……残ったのは私だけで……」

「私には……もう何も残って」

「何も残ってないなんてことはないでしょう？それに、ないならこれから新しく」

きゅっと、僕の右手が理恵さんの左手に握り締められました。

「残ってないって、思ってたんだけど……」

一筋の希望に縋るように絞り出された、蚊の鳴くような細かい声。

「私には……まだ……貴方が……」

僕の瞳を見つめる、黒曜石のような瞳。

予想外です。

僕は何て答えてあげればいいのか。

まさかこんな展開になるとは思ってもいなかったもので、少し動揺しています。

「ねえ……今回の件が済んだら、もう……会えないのかな？」

「それは……」

確かに、いずれ来る輸送ヘリにこのまま彼女を乗せてしまえば、もう二度と会うことはないでしょう。

でも……仮に、僕が彼女に自分の住所を教えてしまえば……。

でもそれは規定違反……？ じゃないですね、よく考えてみれば。

理恵さんはまだ僕の職種について知っているワケではないですし。

「ねえ、もう……会えないの？」

「あ……その……ですね……」

うーむ……満足に思考が働かない……こんなことは想定外です。どうしましょう？

何度も言うようですが、理恵さんのこれからのことを考えれば、彼女がこれ以上僕に関わってしまうのはよろしくないのです。

でも、僕個人の感情としては……。

「その……これからも僕と会う……となると、条件として僕が何者であるかお教えすることができなくなってしまうのですが」

「飛鳥が何者かなんて、もうどうでもいいッ」

えっ……？

「飛鳥が何者で、今までどんなことしてきたかなんてどうでもいいよ！ これからも貴方と一緒にいられるのなら、私、もう何も聞か

ない。だから……だからっ！」

「……………」

理恵さんの告白に、僕は言葉を失います。

「私、初めて貴方を見たときから、ずっと飛鳥のことが好きだった！ 勇気を振り絞って声を掛けて、なんとか親しくなれて、初めてウチに夕食食べにきてくれたときなんか、嬉しくて心臓が張り裂けそうだったんだよ!？」

僕は彼女の潤んだ瞳から零れ落ちる涙を見つめながら、思います。僕のような”裏”の人種が、その先に続けられるであろう台詞に淡い期待を寄せてしまうのは……罪になるのだろうか、と。

「離れたくない! ずっと一緒にいたい! お願い……私を」

ああ……彼女は……こんなにも僕を想ってくれていたんだ。

「私を……一人にしないでください」

ならば……僕が彼女に返すべき言葉は……。

最後まで言わせることなく、僕は理恵さんを抱きしめました。彼女の瞳に映る”未だ迷っている僕”に……今の僕の決意を伝える為に。

「僕は都合上適度に忙しい身分なので、お互い会いたくても、なかなか都合がつかないかもしれないかもしれませんよ?」

「だったら、いつでも会えるように私が飛鳥のウチに住み込めば万事解決だね」

「いえ、それは……。僕が住んでる場所は同棲禁制の一人暮らし専用アパートなので……」

「なら、飛鳥が私のマンションに住めばいいでしょ？」

「なんですか、そのパンがなければケーキを食べればいい的な発想は悪くありませんけど。」

「でも……一人暮らしで尚且つ年頃の女の子の家に僕みたいな野蛮人が住み込むなんて……理恵さんはよく理解してますか？俗に言う同棲になるんですよ？」

「そう、僕はこれでも男なのです。男は狼なのです。気をつけなくてはいけないのが淑女の嗜みなのです……って、酷く混乱してますね、僕。」

「私と一緒に住むの……嫌？」

「ぐほうッ!!」

その捨てられた子犬のような瞳で上目遣いは反則です。レッドカード三枚。

そんな風に言われたら、嫌なんて言えるワケないじゃないですか……。

「後悔しても知りませんからね……」

「するワケないもん」

そう言って嬉しそうに微笑む理恵さん。

これでは僕の理性が退場しそうです困ります。

でも……たとえば彼女の行動が、身内を失った悲しみを紛らわす為の

その場限りの気の迷いでもいい。

彼女が僕の存在を望んでくれる限り、僕はずっと彼女の傍にいよう。

さようなら。孤独を好んでいた過去の僕。

僕は誰かと一緒にいられることの喜びを覚えました。

僕の手を優しく握り返してくれる、この柔らかな彼女の手がある限り……僕はもう迷わない。

番外編その2-5

その後、仮設キャンプ内で2時間ほど待ったあと、ようやく到着した輸送ヘリに乗って理恵さんはこの街から脱出しました。

ヘリが基地に着いた当初は、「飛鳥と一緒にいる！」と言って子供のように駄々をこねた彼女でしたが、僕の本当の住処であるアパートの住所を記した紙と合鍵（常に2つ携帯している鍵の予備の方）を渡すと、渋々ながらも素直にヘリに乗ってくれたので良しとします。

というのが、20分前の話。

そして今、僕は市役所に向かっているところです。

自衛隊が所有しているオフロードタイプの二輪車を拝借できたおかげで、比較的スムーズな帰還が叶いそうなのですが、ここで問題が一つ。

僕がいない間に市役所周辺一帯が戦場と化していたことです。周りには幾重ものバリケードが嚴重に積み重ねられており、行きにはあつた僅かなスペースも、今では完全に埋められています。

僕は感染者の群れから100mほど後ろに離れたところで、どうやってここを攻略しようか考えることにしました。

感染者は主に音と匂いに惹かれるらしいので、市役所に密集してドンパチやっている自衛隊員らに夢中な彼らが、僕の存在に気付くことはありません。

ホント、彼らの知能が退化していてよかったと思います。

「さて、どうやって帰りましょうか……」

思わず独りごちてしまいましたが、状況が変わるワケもなく。

何かスロープのようなものでもあればいいのですが、そこは現実、映画のように都合のいい展開になんてくれません。

周り道しようにも、僕がいるこの場所はただっ広い二車線道路が一本まっすぐ通ってるだけで、脇道など一切見当たらず、仮にここから引き返して道を探すとしても、大幅なタイムロスになってしまいます。

まあ、たとえ大幅なタイムロスになろうが、身の危険を鑑みれば、引き返して別の道を探すという選択肢が妥当なのでしょうが……。

先ほどからうるさく身を震わせている携帯電話の様子からして、そういうワケにもいかないようです。

ならば、特に頭がキれるワケでもない僕に残された道は唯一つ。

「バリケードまでの強行突破……」

市役所まで続く二車線道路を覆うように取り囲んでいる感染者の群れと、彼らに対して放射状に火線を展開している自衛隊&スペシャルでアサルトな警官隊。

感染者の脅威と味方からの銃撃の脅威というなんともリッチなこの状況、泣きたくなります。

まあ、どちらかという感染者より、味方からの流れ弾やら誤射やらのほうが心配なのですけど。

願わくば、感染者に埋もれる僕の姿を確認できた隊員らが、一瞬でも射撃を躊躇してくれませうに。

僕は軍用バイクのシフトペダルを踏みつけ、ギアをニュートラルか

らローに切り替えます。

ガコン！とギアの心地よい響きを確認した僕は、一度だけ大きくアクセルを回すと、目標に目掛けて一気に突っ込みました。

一度走り出したからには迷いは無用。

猛スピードで走っているというのに、感染者の群れの隙間を縫う…

…なんて小賢しい真似などできるはずないのですから。

僕はギアをセカンドまで上げて放置すると、右手でアクセルを吹かしながら、左手でホルスターからグロツク18Cを抜き、進路上で邪魔になると思われる感染者に向けて発砲します。

狙いは斃すことではなく、銃弾のマンストッピングパワーで怯ませること。

勿論、連射などするわけがありません。

進路を塞いでいる感染者の胴体に向けて、確実に銃弾を撃ち込んでいきます。

僕の想定通り、銃弾を受けた反動で仰向けに怯む感染者達は、素直に道を譲ってくれました。

そう、ここまでは順調なのです。

問題は……。

チュインッ！

と、音速で飛来してくる鉛玉。

反応がとてつもなく鈍いことに定評がある感染者が僕の接近に気付く頃には、僕は既にそいつを通り過ぎているあとなので、突っ切ることで自体は楽なのですが、僕の頭や腕を掠めるように飛んでくる銃弾だけはどうしようもありません。

まさしく運頼み。

感染者の皆さん、僕の為に肉盾になってください。とお願いしつつ、できる限りのスピードで道路を一直線に走り抜けました。

結果

なんとか感染者の群れの中を突っ切ることができた僕は、後輪を滑らせながら市役所の敷地内に進路を変更し、偶然そこに居合わせた哀れな感染者を一人ほど轢き倒しつつ、軍用バイクをバリケードへと突っ込ませます。

そのままスピードを上げつつ、前輪がバリケードと接触する寸前で、一気にスロットルグリップを回しました。

後輪に暴力的な力が加わった結果、前輪は大きく持ち上がり、空を見上げた状態へ。

所謂ウィリー走行になった瞬間、僕は左足をシートに、右足をハンドルの上に乗せ、右手をグリップから離します。

そして、車体がバリケードと激突する前に、右足に力を込め、一息に跳躍しました。

後ろでバイクが轟音をたてて粉碎する中、空中で一回転して体勢を立て直しつつ、地面に着地。

慣性の法則で転がる身体を乱暴に両手で静止させます。

「はああ………なんとか………生き延びれたようですね………」

人類史上初のヘイロー降下を実現した某大きなボス様ばりの着地態勢のまま、深いため息をひとつ。

銃弾の雨を掻い潜りながらの帰還はかなりスリルがありました。

できるならもう二度と味わいたくありません。

「あはは……どうも」

驚愕の眼差しでこちらを見つめ続ける隊員さん達に軽く愛想笑いを
済ませると、作戦本部で待機しているであろう菅原一佐のところへ
向かいます。

”任務”はとくに終わっていますが、僕の”仕事”はまだ
終わってはいないのでから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3595e/>

THE RED MOON

2010年10月15日19時20分発行